

ONNO

慶應義塾大学商学部  
小野晃典研究会  
OB・OG会 会誌

SEMINAR

SEMINAR



2020  
Vol. XIV



## 目次

巻頭言	1
小野 晃典先生	
OB・OG 会長の挨拶 ——新卒1年目の話をしようか——	2
第1期ゼミ長 白木 俊介	
OB・OG 通信	8
第1期OB 酒井 誠太郎 「20年ぶりのライダー復帰」	8
第2期OG 橋本 友香 「近況報告」	10
第3期OB 高木 研太郎 「New NormalにおけるCX・マーケティング」	11
第7期OG 菊盛 真衣 「きみがため はるののにいでて」	13
第8期OB 黒沢 祐介 「めんどくさい先輩」	15
第9期OB 竹内 亮介 「博士」	17
第9期OB 渡邊 光平 「近況報告」	18
第10期OB 石井 隆太 「#大学教員の日常も大変だ」	19
第13期OB 川村 澄明 「剥がれかけの鱗」	21
第13期OG 山本 彩理 「インドア趣味, 始めました」	23
第16期OB 北澤 涼平 「FPS ばかりやってきました すみません」	26
第16期OG 土谷 鈴 「想像が創造する世界」	27
第16期OB 柳原 慎平 「これが私のニューノーマル」	29
結婚・出産特集	31
第8期OB 荻野 真央 「里に実り咲くは家族なりけり」	31
第9期OG 清水 鈴 「プロポーズをセルフプロデュース」	33
第10期OB 仙田 晃史 「“Hello, World!”」	34
第11期OB 立松 宗磨 「コロナ禍での結婚式」	35
第16期OG 平間 遥絵 「人とつながる大変さ」	37
第17期生 卒業エッセイ	39
第17期生 江碕 舞香 「ふるさと」	39
第17期生 古橋 実咲 「あつという間では無かった2年間」	41
第17期生 森 直也 「小野ゼミ生で居続ける意味を与えてくれた君へ」	42

大学院生 卒業エッセイ .....	44
第 18 期大学院生 飯井 虹之介 「濃密な 1 年間」	44
ゼミ生 (第 17, 18 期) のご紹介 .....	45
大学院生のご紹介 .....	49
2020 年度ゼミ活動紹介 .....	50
2020 年度活動紹介	50
第 18 期生 三田祭論文プロジェクト紹介	53
第 17 期生 卒業論文テーマ紹介	54
AMR (流通経済研究所) 主催「食と農・流通 (小売・外食) における新型コロナウイルス 対策懸賞論文・提言」受賞報告	55
四分野インゼミ研究報告会参加報告	59

## 巻頭言

小野 晃典先生

「学生時代、センセーったら、将来は自分のゼミを持って、ゼミ生を連れて来ますって仰ってたのよ。まさか本当にそうなるなんて。大出世ね！」——大衆割烹つるの屋の“ばあば”の20年来の口癖だ。若大将も、「それ、本当に嬉しいな！ 小野ゼミ、あと何年？ 俺、ギリギリそんなときまで働けっからさ、ご最真に！」と合の手を入れる。私には大口を叩いた記憶がないが、ともかくも、つるの屋は小野ゼミ御用達になった。

私の恩師は、常に凜とした教授で、学生たちの通う大衆店に足を運んでいただくことはなかったのだが、私はいえ、この古めかしい居酒屋が妙に好きで、学生時代よりむしろ教員になってから頻繁に通った。論文執筆やゼミ運営について教室で議論を戦わせた後のクールダウンには、気負いのない大衆店こそ相応しいからだ。瓶ビールを注ぎ合い、焼酎のお湯割りを作り作られながら、師弟や先輩後輩の別なく同じ鍋を突いた記憶は、私のみならず、小野ゼミ卒業生諸君の心の中にも刻まれていることだろう。

いくつかの論文のアイデアが、つるの屋で生まれたし、いくつかのゼミ運営上の難局は、つるの屋で乗り越えた。プロジェクトが終わって、喜びに弾けた飲み会もあったし、嬉し泣きや悔し泣きの飲み会もあった。周りを見渡すと、店内には塾生・塾員とおぼしき客ばかり。三田祭プロジェクト終了を一緒に祝い、ゼミ生の誕生日さえ一緒に祝ってくれた。そして、壁や柱に所狭しと掛けられているのは、大量の三色旗ペナントだ。その空間に身を投じれば、大学の教室より、神宮のスタンドより、慶應義塾らしい雰囲気包まれる…。つるの屋は、そんな唯一無二の居酒屋だ。いや、そうだった…。

もはや、つるの屋は存在しない。新型コロナウイルスが猛威を振るう中で、ひっそりと閉店した。理由は、若大将の死。建物の老朽化に伴って致し方なく一時閉店し、再起を図って再開準備中の痛恨の出来事だった。小野ゼミの最終期が卒業するまで店を続けてくれると約束したのに。再起を果たせなかった無念はいかばかりか。息子、甥に先立たれた“じいじ”と“ばあば”の悲哀はいかばかりか。

ところが先日、驚くべきニュースが飛び込んできた。福澤研究センターが、旧つるの屋店内の三色旗ペナントを、小野ゼミ寄贈の2枚を含む130余枚全て、慶應義塾史料として所蔵したのだという。展覧会も開催する予定だと聞く。私の出世に驚いていたつるの屋のほうこそ、驚くべき大出世だ。大出世どころではなく、つるの屋は、何と、慶應義塾史に永遠に刻まれることになったのだ。

ひるがえって考えるに、私と私のゼミ生たちは、今後、どれだけ深く歴史にその名を刻むことができるだろうか。その昔、大口を叩いていた若者がいたというが、その若者は自分が叩いていた大口さえ忘れてしまっている。今一度、大志を抱くべきだ。逆風張帆、この難しい時代にこそ逆風に帆を張り、前へ前へと進むべきだ。そうして、ここまで辿り着いてみると、つるの屋の若大将が手招きしている気がする。

## OB・OG会長の挨拶

### — 新卒1年目の話をしようか —

第1期ゼミ長 白木 俊介

“You can’t connect the dots looking forward; you can only connect them looking backwards. So you have to trust the dots will somehow connect in your future” 「未来をみて点を結ぶことはできない。過去を振り返って点を結ぶだけだ。だから、将来、いつか、どうにかして点は結ばれると信じなければならない。」

また、スティーブ・ジョブスのスピーチの一節からエッセイの書き出しを始めてしまいました。2008年、2011年度のエッセイ、2020年のOB・OG講演会でも、私はこのスピーチの一節を引用したのですが、毎年、エッセイを書いていると、好きな言葉の引用もネタ切れですので、また、使います。

スティーブ・ジョブスはリード大学に入学後、すぐに大学を辞めますが、カリグラフィの講義だけ続けます。彼はこの授業で、文字の組み合わせに応じて文字間隔を調整する手法や、美しい字体は何が美しいのかを学びました。もちろんその時、これらが人生の上で実際に役に立つ可能性があるとは思っていませんでした。しかし10年後、最初のマッキントッシュ・コンピュータを設計していた時、学生の頃の記憶がよみがえってきたのです。スティーブ・ジョブスはカリグラフィの授業で得た手法をすべて組み込み、美しいフォントを持った初めてのコンピュータが誕生させました。もし、彼が大学であの授業にもぐりこんでいなかったとしたら、マックには複数フォントも字間調整フォントも入っていなかったでしょう。もちろん、大学にいた当時、そんな先々のことまで考えて点と点をつなげてみるようなことはできませんでした。しかし、10年後から振り返ってみると、非常にはっきりと見えるわけです。

いつも、エッセイでは近況を伝えたり、今の時代を切り取ったりすることが多かったのですが、今回のエッセイでは、私の社会人1年目を振り返りつつ、その点が、現在に結び付いているのかを語ってみたいと思います。このエッセイの多くの読者は、若い人が多いと思います。私の若かりし頃の経験が、皆様の何かのヒントになれば幸いです。

#### ◆広告会社1年目の仕事：ノベルティ制作

私たちの就職活動時2001年は就職氷河期でしたが、新たな採用側の試みとしてインターンシップが始まった頃でした。広告業界では博報堂が先駆けて、インターンシップの実施を始め、小野ゼミ1期生の皆さんはご存知だと思いますが、私は大学3年生の夏、幸運なことにもこの第1回の博報堂インターンシップの切符を手に入れ、2週間、当時、芝浦にあった博報堂本社で研修に参加し、すっかり、広告会社の仕事に魅了されていました。その後、大学3年生の12月に、インターンシップ参加者だけに与えられる先行最終

面接が行われました。「博報堂の内定をもらえる！」と自信を持って臨んだものの、あえなく不採用…。その後も、ほぼ広告業界 1 本に絞った就職活動を続けて、最後に内定がもらえた広告会社は、当時の広告会社の売上ランキングで 13 位の会社（電通ヤング・アンド・ルビカム）でした。博報堂の内定をもらったインターンシップの友人を羨ましく思い、「いずれは、自分の大手の広告会社に転職してやる」という、コンプレックスと未練たらたらの状態で入社式を迎えたのを今でも、覚えています。「売上が 13 位でも、外資系の強みを人一倍早く身に付けて、大きな仕事をしてやるんだ」という就職活動で、第 1 志望に行けなかった学生にありがちな劣等感と焦りが芽生えていました。そんな私が、就職先の広告会社で 3 か月の研修を終え、配属された部署は、輸入車クライアントを担当する営業部（アカウントチーム）でした。その部署で、最初に与えられた仕事は、ノベルティ制作です。このノベルティ制作の仕事を与えられたときに「この仕事は、クライアントにとって、一部の小さな仕事ですよ。」と先輩につぶやいて、ひどく、怒られたのを今でも覚えています。博報堂のインターンシップで、テレビ広告で目にするナショナルクライアントの華々しい仕事を見せつけられたため、期待不一致が起きていたのです。その当時の私には、個々のクライアントが抱える個別の課題を理解できるほどの器量はまだありませんでした。

#### ◆ATL と BTL

ここで、輸入車のビジネスやノベルティの役割を簡潔に説明してみましょう。高級輸入車のターゲット顧客は高額所得者であり、富裕層です。もちろん、ブランド力の向上にテレビ広告は価値がある媒体ですが、その一方で顧客となりうる富裕層への郵送ダイレクトメールの方が販売促進に効果がありました。今の時代であれば、郵送のダイレクトメールの役割は、デジタルメディアに取って代わりつつあるかもしれませんが、その当時、顧客となりうる富裕層



ダイレクトメールの裏側に掲載される来場記念品ノベルティ

に直接届く郵送のダイレクトメールは、費用対効果の高い販促メディアでした。このダイレクトメールの裏面に掲示されるのが、来場記念品のノベルティ（非売品）です。「記念品ももらえるし、1 度、車を見に行ってみるか」と背中を押すインセンティブとして用意されています。

広告制作業務の領域は ATL（Above the line）、BTL（Below the line）という分け方をされます。ATL はいわゆるマスメディアを扱う仕事、BTL はノベルティ制作を始めとして、印刷物やイベントなど販売促進用の制作業務を指します。ATL と呼ばれるマスメディアの仕事は、莫大な広告収入が得られ、利益率が高い業務です。一方で、BTL の業務は、守備範囲が広範かつ、時間と手間がかかる業務として扱われてきました。しかし、この手間のかかる BTL 業務を重要視するクライアントも多く、BTL 業務のために一緒に汗を

かいてくれる広告会社を求められることも多いのです。

#### ◆アイデア出しの日々

毎月1回郵送されるダイレクトメールには、毎回新作のノベルティを掲示しなくてはなりません。年12回のノベルティの提案を、広告会社からクライアントに全12回行っていました。富裕層の見込み客の目に留まる「斬新、ラグジュアリー、エクスクルーシブ」なアイデアを求められます。

新卒社員を指導する立場の先輩社員に連れられて、私も午後6時過ぎにノベルティ制作会社まで出かけます。ノベルティ制作会社では、次回のクライアントへの提案に向けて、様々なノベルティ案を机一杯に広げて用意してくれています。しかし、長年の経験とクライアントの機微を知りえた先輩からすると、満足がいかないようで、そこから、さらにアイデア出しが始まります。男性ファッション誌を開き、服の横に置かれている小物や有名高級ブランドの装飾品、革小物を見つけて、「このアイテムにロゴをあしらって、予算内で制作が可能か、納品日までのスケジュールに間に合うか」といった細かなフィージビリティ（実現可能性）を探っていきます。さらに「何か面白いアイデアない？」と聞かれ、私も「ロゴをかたどったペーパーウェイトとかどうでしょう？」といったブレインストーミングを午後10時頃まで行う日々でした。この業務に慣れるまで当時、「なんて、愚直で時間のかかる業務なんだ」と呆れていた気持ちもありました。

多くの場合、私から提案した案は却下されていくのですが、その理由の1つは、それぞれの制作物の制作工程の理解が希薄だったからです。既製品のマグカップにロゴを印刷するのであれば、在庫が確保できれば、1か月半くらいでできるでしょう。革小物や縫製品であれば2か月半くらい、キーホルダーのように造形型を必要とするものであれば、4か月以上かかることもあります。ノベルティ制作を開始してから出来上がるまでのタイムラインは、ダイレクトメールを郵送する時と同じでないといけません。それまでに、出来上がるアイテムでない限り、そもそも提案できないのです。



最近の輸入車の来場記念品例。制作過程における注意すべきポイントが分かってしまうのは、経験によるもの。

「アイデアとは既存の要素の組み合わせである。」と、1940年に出版された「アイデアの作り方」でも書いてある通り、アイデアは0から生み出すものではなく、既に存在するモノを組み合わせる方法が正しいのです。ノベルティのアイデアを生み出す場合も、とにかく、たくさんの既存のノベルティや雑貨を知る必要があります。私は、少しでも、役に立てる存在になろうと、週末も暇を見つけると、無印良品、フ

ランフラン、コンランショップといったインテリア雑貨のお店に足を運び、その中で見つけた面白そうな雑貨を眺め、「この製品だったら、どのくらいの単価で制作が可能か」、「どのくらいの納期で出来上がるのか」と考えながら、写真を盗み撮りしたり、名前を覚えたりして、次のアイデア出し会議で提案するのでした。また、自分の親を始めとして、高級車のターゲットとなりうる年齢層の人が身につけているアイテムを観察したりするようになりました。

自分としては、斬新なノベルティと思い、何度も提案するのですが、採用されないアイテムリストがいっぱいになると、悔しさのあまり、クライアントにお買い上げされない代わりに、自分で雑貨店に行って、購入して部屋に飾っていたことをよく覚えています。「今回の提案で、クライアントのロゴマークを付けて制作することはできなかったけど、別のクライアントに提案して、制作してやる」と意気込みつつ、部屋は雑貨で溢れていくのでした。

#### ◆「捨て案」を知った日

ノベルティ制作会社とのやりとりを終えたら、いよいよ、クライアントへの提案です。選りすぐりの3案を持って、次の来場記念品をクライアントに決断してもらい、制作開始に進まなくてはなりません。このプレゼンにおいて、最も恐ろしい返答は、「どれも悪くはないんだけど、もう少し、ホンモノ感のあるアイテムはないかなあー。」といった曖昧模糊としたクライアントの返答です。なぜなら、クライアントのフィードバックが曖昧なまま「分かりました。再度、提案しなします。」と持ち帰って、ノベルティ会社にクライアントの曖昧な言葉をそのまま伝えても、正しい軌道修正ができないからです。「お前は、伝書鳩か？」と揶揄され、時間ばかりがいたずらに過ぎます。ノベルティの制作が遅れると、ダイレクトメールに掲載する写真撮影日程、ノベルティ配送日程などの調整が必要となり、裏で動いてくれている様々な業者に迷惑をかけることとなります。クライアントに対峙する代表者として、必ず、期限までにアイテムを決めさせることは、制作代表者の役目であり、それができる人は、制作会社、カメラマン、印刷会社などの裏で動いているその道のプロフェッショナルにも信頼されるのです。「白木さん、今回は、必ず、1回で決めてきてください！」とクライアントと一緒に訪問できないノベルティ会社の20歳も年齢の離れた社長が、真剣なまなざしで私に訴えかけ、想いを託すわけです。その社長も「新卒の若造に何ができるのか...」という気持ちもあつたでしょう。しかし、その若造を信頼するしかないノベルティ会社の社長の気持ちを噛みしめて、提案に臨み、それでも、1度で、クライアントを納得させられない不甲斐ない自分にやるせない気持ちになるのでした。

裏方として動いてくれる人を裏切らないためにも、クライアントから曖昧な返答をされた時には、必ず、その会議の場で詰める必要があります。多くの場合、クライアントは広告会社に任せっきりのため、スケジュールを把握していません。本当に、納期がギリギリである場合は、はっきりとそれを伝えなくてはなりません。また、具体的にどのように修正すれば、クライアントが満足か、明確な指示をもらえるように促します。そのため、提案前の想定問答はとて、重要でした。例えば、ロゴの一回り大きく入れること

は、期限内で変更可能だが、ロゴを刺しゅうで入れるのは期限内で間に合わないといった制作工程を理解し、できる限り、その場で返答できるようにしておく必要がありました。

この時に、先輩に教えてもらったテクニックが「捨て案」です。3案のノベルティ案を持っていくのであれば、その中に、あえて採用されないであろう案を忍ばせておくのです。人は比較対象があった方が、アイテム選択がしやすいからです。「A案を着地点とするならば、捨て案はあえて、価格が高いB案にしておこう。」といったやり取りを提案前に議論を交わしました。

#### ◆ノベルティ制作が教えてくれたこと

新卒1年目の業務は、新たな仕事に加わりながらも、結果的に5年以上も付き合う仕事になりました。5年経ったときには、チームの中でノベルティ制作なら1番、詳しい状態になっていましたが、一方で、特殊な専門技術ばかりが身についた自分に焦りも感じていた頃でした。この頃、友人の武勇伝もとれる派手な仕事の話を知ると、どれも「隣の芝生は青く見える」状態だったのだと思います。広告会社の業務は、戦略提案も行う一方で、広告制作、販売促進の現場作業にまで関わることが多い仕事です。そのため、関わった業界の専門性が高まり、その業界のクライアントをもつ広告会社への転職ができる一方で、逆にその世界から抜け出せなくなる不安を感じていた頃でした。即ち、ノベルティ制作の専門性が高まりすぎると、転職しても、クライアントが変わっても、ずっと、その業務を遂行することもあり得るのです。イベントの仕事などに多いですが、心底、その専門性の高い業務が好きで続けている人もいますが、私はもっと、ブランド調査、CM制作、そして戦略提案など、未経験の業務に携わりたいのに、関われないという焦りの方が先に来て、その当時は、このノベルティ制作の経験が、将来、役に立つものとなると思いませんでした。しかし、今、見返してみると、この業務は広告制作の基礎が詰め込まれた業務であり、多くのことを学ばせてくれたと思います。スケジュール管理、マルチタスク、提案のテクニックなどありますが、それ以上に大きいのは、小さな制作物であっても、専門性の高い集団が、真剣に取り組んで、作っているということです。実際に、制作工程に関わったからこそ、制作に関わる人の本気度の見分けがつかえます。また、こだわりが高く、質の高い仕事をしてくれるプロフェッショナルへの尊敬の念を忘れずに、今でも、対応することができるのは、20歳も年齢が離れた社長とのやり取りがあったからでしょう。

#### ◆戦略は細部に宿る

「戦略は細部に宿る」と言ったのは、郵政民営化時に大臣をしていた竹中平蔵です。「理想的な青写真だけでなく、実現する為の具体的なプロセスまで含めて、細かい戦略を積み上げていかないと、実現できない」と述べています。多くのコンサルが、今では戦略だけでなく、実行支援にまで首を突っ込むようになったのは、まさに、竹中さんがいう細部に宿る細かい戦略の積み上げこそが、支援先の組織に浸透し、継続性、実効性のある企業のDNAになるかどうかのカギを握るからだと思います。

ご存知の方も多いと思いますが、現在、私は製薬会社で、デジタルマーケティングの業務を担っており、

既に、広告会社の業務から足を洗っております。しかし、新卒1年目の時から関わったノベルティ制作の経験は、他業界にいても、自分の強みと感ずることは多いです。事業主側のマーケティングは、1年間のマーケティングプラン（戦略）を策定し、上長に承認をもらった上で、実行へと移していきますが、この戦略を策定する段階で、具体的なフィージビリティ（実行可能性）のイメージが湧いているかどうかは非常に大切だと思います。多くの同僚は、細かな実行のイメージが湧いていないために、戦略通り実行できないといったことも見受けられます。いわゆる、机上の空論となりかねないわけです。

昨年、ある製品の APAC のデジタルマーケティング戦略を立案するプロジェクトに参画し、中国、シンガポール、オーストラリアのメンバーと週1回のミーティングを重ね、最終的に APAC のマネジメントチームに戦略提案をする機会を頂きました。APAC の主要国のインタビュー、マーケットリサーチを終え、戦略の骨子を定める段階となり、この時に重要になってくるのが、実現可能性のあるコンセプトを創りあげることです。プロジェクトメンバーの中には、壮大なコンセプトを提案してくる人もいました。しかし、その壮大なコンセプトを、何年かけて行うのか、どのようなマイルストーンが必要なのか、どのくらいの費用がかかるのかという具体的な話になると、話が止まってしまいます。過去に制作や運営業務を行っていないと、コンセプトが良かったとしても、具体性に欠けてしまいます。特にデジタルマーケティングのような最先端の領域は、様々な Buzz word が飛び交っており、提案を受けるマネジメントチームも、詳しくないため、見かけが良いコンセプトに踊らされてしまうケースもよくあります。だからこそ、今の自分たちの立ち位置をよく理解し、身の丈に合った戦略立案に私はこだわりました。なぜなら、プロジェクトが承認されて、実行段階になって、思うような結果が出なくて困るのは私たち自身だからです。



APAC プロジェクトメンバーとの TEAMS 会議のスクリーンショット。  
コロナ禍のため、8 か月に及ぶプロジェクトは1度も会わないまま完了した。（著者は下段の左端）

#### ◆最後に

長くなりましたが、最後まで読んでいただきありがとうございます。今回、このような新卒1年目を振り返る内容をエッセイに書いたのは、森岡毅さんの「苦しかったときの話をしようか～ビジネスマンの父が我が子のために書きためた働くことの本质～」を読んだことがきっかけとなりました。森岡さんは、この本の第5章で P&G 時代の苦しかった体験を書き綴っています。失敗談も含めて、包み隠さずに書かれたリアリティにこそ、多くの人の気づきや刺激になると思い書いてみることにしました。森岡さんのように、うまくは書けないですが、少しでも、皆様の刺激になれば幸いです。

## 20年ぶりのライダー復帰

第1期 OB 酒井 誠太郎

40歳になってまたバイクを乗り回すようになった。以前バイクに乗っていたのはちょうど自分が小野ゼミ現役生の頃だから、20年ぶりになる。

再びバイクに乗るきっかけは、全部コロナのおかげだ。

昨年の令和2年冬から春にかけての自粛ムードが続いた後の7月。感染者も減少傾向なので、ようやく外にも出られるかな、という時期。海の日<sup>1</sup>の3連休に実家の金沢に新幹線で帰省しようか、と思っていた。だが、再び感染者が増えていき、また自粛ムード。帰省は見送ることにした。そんな



ADV150と日の出

時にふつふつと思いが込み上げてきた。

ああ、遠くに行きたい。

ここ数年、それほどまでに旅を求めていなかったのに、抑圧されるとかえって感情が高ぶってしまうのは自分の性分なのだろう。旅に出たくなった。自分は東京下町にある路地奥の貸家に住んでおり、交通手段といえば徒歩、自転車、バス、電車になる。車は持っていない、だって必要ない上に維持費がかかるから。駐車場は家になく、近所で借りても月に2万もかかる。ロードバイクも持っているが、再びマッチョに鍛える根性もない。かといって、公共交通機関での遠出は憚られる。鬱々としながら、ふと気づいた。

バイクがあるじゃない。

駐輪場であれば数千円で済むし<sup>2</sup>、その他維持費もかからない。オフロードバイクか、スクーターか、悩んだ末 ADV150 という、排気量的にはギリギリ高速に乗れる HONDA のスクーターを買うことになった。ダートを走ってみたいという思いがあった一方、バイク買ったら気軽に登山やキャンプに出かけたいので、と下山後疲れた体にも優しく、収納も多いスクーターが良い。また、妻を後ろに乗せて旅するのも快適なバイクがいい<sup>3</sup>ので、シートも幅広なスクーターの方がやっぱりいい。さらにこの ADV はサスペンションが結構深いので、未舗装走行にも耐えうるらしい<sup>4</sup>。ということで ADV150 に<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 当初は家の前に止めようと思っていたのだが、スペースが狭く諦めることにした。

<sup>2</sup> 結局、まだ一度しか乗せていない。そしてもう寒い季節になったので乗ってくれない。

<sup>3</sup> 現在主力となる市場が東南アジアであり、未だ未舗装地帯が多く残っていることも要因とのこと。

<sup>4</sup> 正確な決め手は HONDA が自ら運営しているレンタルバイクサービスで試乗がてら ADV150 を借りたら、300km しか走っていない新古同等のバイクがあると店員に勧められたから。レンタルバイクとして利用提供していたがコロナで利用者が全くなかった末に中古販売車に卸されたため、新古同等クオリティで、しかも ETC が付いて新車より万安かったという。半額シールにつられる、価格弾力性の極めて高い自分ならではの購買理由。後悔はしていない。

購入後は関東圏をツーリングするようになった。特に未舗装の林道をよく走っている。オフロード仕様のバイクではないが、案外走れる。とはいえ、半年でアンダーカバーが欠け、フロントフェンダーが割れてしまった<sup>5</sup>。

近年の大型台風続きで多くの未舗装林道は通行止めのところが多い。道中完全に陥没している道路も何度か見た。コ



林道にて。標高が高くなるうち路面が雪に覆われていった。

ロナがきっかけになって沸いた自分のもう1つの世迷言は「マイ山林を所有して自分の手で小屋が作りたかったのだが<sup>6</sup>、山林の現状を目の当たりにすると、自然を治めるということがいかに大変か、そんな安易なものではないと言うことが良くわかった<sup>7</sup>。

さて、バイクの話に戻すと。ついに今度は大型二輪の免許まで取ってしまった。知り合いに「やっぱり、大型は違う」という話をされて、一度きりの人生一度は大型にも乗りたい、と思い、在宅勤務であることを良いことに、朝夕の時間を使って2カ月かけて取得<sup>8</sup>。

とはいえ、まだ外も寒いし、借りるのですら高いし、一度も大型には乗れていない。買い替える踏ん切りもまだついていない。意外に非力<sup>9</sup>でコンパクトなADV150でもいいんじゃないか？と思うようにもなっている、そんな下らぬ贅沢な悩みを抱える不惑な日々です。



イブに合格し、クリスマスに交付。

<sup>5</sup> 時代も進んだもので、正規の替え部品をネットで買えた。HONDAが公式に出しているパーツカタログで部品の型番を調べて、あとはECサイトのWebikeで注文。両方合わせても1万円しなかった。まだ交換はしていない。買い替えるときに交換するつもり。

<sup>6</sup> 実際今小屋づくりの講習も受けている。NPO法人「地球のしごとと大学」の開催する「伝統構法建築学部」という講習。こちらもコロナで組み立てを前に延期中ではあるが、参加者は地方で既に移り住み、山林での生活や地方の山里を生かした生活をしている人が多く、大変刺激になった。

<sup>7</sup> 更には、環境問題に真摯に対処していかなければならない、とは思いますが、エコバッグやSDGs対応で十分なのか、という疑念は斎藤浩平『人新世の「資本論」』を読みつくづく感じる。

<sup>8</sup> 大型自動二輪取得は最短8日間で取れるが、朝夕の時間制約に加えて、コロナで皆感じることは同じで殺到したのか、それとも休業期間の影響なのか、かなり混雑しており、なかなか予約が取れず長期になった。

<sup>9</sup> 非力すぎるので、高速でも80km/h走行が最適。選ってスピードを出し過ぎず安全でいいのではないかと、思う。

## 近況報告

第2期 OG 橋本 友香  
(旧姓 中村)

小野先生、皆様、お元気ですか？ ご無沙汰しており、大変すみません！ 私はNYで元気にしております。邦銀にてCSRを担当しておりますが、あとは五嶋みどりさんが立ち上げた非営利団体にて、理事会メンバーを勤めており、マーケティングを担当しております。5歳の息子と18ヶ月の娘もおり毎日ドタバタしておりますが、なんとか楽しんでおります。

コロナ生活に限界を感じ、フロリダに家を借りて5週間ほど環境を変えて生活してみました。今はリモートワークなので仕事もそのまま続けられ、なおかつ天気にも恵まれ、とても楽しい時間を過ごすことができました。



家を借りる



フロリダで息子とゴルフ

いつか息子とゴルフコースを回りたいと思っていた夢が想像以上に早くフロリダで実現しました。とっても幸せでした！

ニューヨークに戻ってきて数週間経ちますが、雪が頻繁に降っております。左下は、先日庭でソリ遊びをした時の写真です。ベランダにカマクラも作ってみました！

コロナで日本に一時帰国できていませんが、いつかまたお会いできること楽しみにしております。ご自愛ください。



ソリ遊び



息子とカマクラ



ベランダのカマクラ

## New Normal における CX・マーケティング

第3期 OB 高木 研太郎

COVID-19 が猛威をふるったまま 2020 年が終わり、2021 年になってしまいました。皆さんの身の回りでも授業がリモートになったり、飲食店が 20 時閉店で外食の機会が減って自炊や Uber Eats の利用が増えたり、どこに出かけるにしてもマスクを着用するようになったりと、生活が劇的に変化したのではないかと思います。

この変化は当然のことながら生活者だけでなく、企業に対しても劇的な変化を与えています。例えば働く環境が大きく変わりました。次ページの図にあるように、これまでは自宅があり、働く場所として物理的なオフィスがあり、趣味その他の時間を過ごす場所がまた別にあるのが社会人の日常生活でしたが、COVID-19 により、自宅の位置づけが大きく変化しています。罹患リスクを下げるために多くの企業がリモートワークを導入することにより、働く場所が自宅へと変化してきています。これまで物理的に場所を替えて行っていた事の大半を自宅で出来るようにするために、多くのデジタル技術を用いるようになってきています。例えば会議は Teams や Zoom によってオンライン化され、趣味でジムに行っていた人は YouTube を通じてレッスンを見ながら自宅でトレーニングし、飲み会は各々 Uber Eats で食べ物を注文してオンライン飲み会を実施する、といった形に変わってきています。

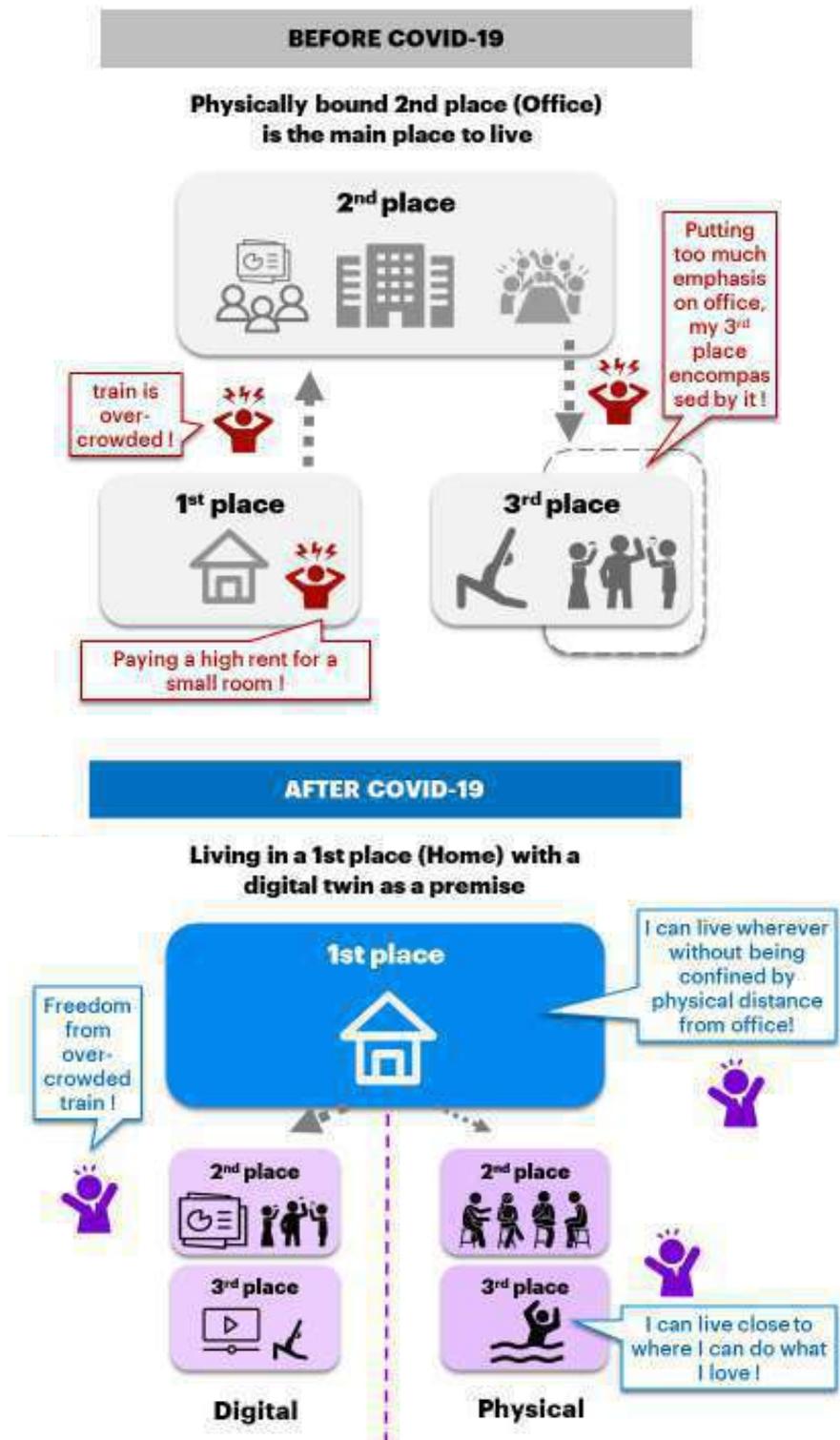
この世界観を体現する企業・人は増えていますが、どの企業でも簡単に実現させられるわけではなく、オンライン会議を実現させるだけでも Teams を全社員に導入するのともとてもコストがかかるものですし、セキュリティを担保しながらのデータアクセスをどう実現するかなど、システムや業務の整備を進めないと出来ないことが山ほどあります。そのため、我々のようなコンサルティング会社は New Normal な世の中に各企業が適応できるよう日々支援している状況です。

よりマーケティング的なテーマでいえば、オンラインでの買い物が増えているので、小売企業の販売チャネル拡大という文脈での EC 構築&デジタルマーケティング推進という仕事が増えてきていますし、消費財企業もここ数年、D2C といって消費者と直接つながり、コミュニケーションをしながら新たな商品・サービスを提供するビジネスを始めていますが、その流れが COVID-19 により加速化しているので、D2C 事業の検討なども Hot Topic となっています。

他にも COVID-19 によって様々な変化が引き起こされ、ビジネスも変わってきていますが、ぜひ皆さんもマーケティングを研究するうえでこの変化も踏まえながらケースや論文に取り組んでいって頂ければと思います。また、このような話に興味を持たれた方はいつでも気軽にご連絡ください。

kentaro.takagi@accenture.com

# How will COVID-19 update our life ?



COVID-19 の影響

## きみがため はるののいにて

第7期 OG 石井 真衣  
(旧姓 菊盛)

世の中的には、とんでもないことになった2020年でした。大変な思いをしている人が世界中に沢山いる一方で、インドア派の私にとっては自宅で過ごす時間が格段に増えたので、むしろ追い風に吹かれた1年となりました。ありがたいことです。つついネガティブな変化に注目しがちですが、折角なので自分の中のポジティブな変化に目を向けたいと思うのです。その変化の1つは、「ご飯が美味しくなった」ことです。これには、料理をする頻度もそれにかかる時間も増えたことと、これまで週末婚状態だった夫で、10期の石井君と一緒に生活できるようになったことが非常に大きく関係しています。

ご存知の方も多いと思いますが、私はとにかく食べるのが大好きです。幸いなことに、親が痩せ型に産んでくれたおかげで、そういう印象が付きにくいのですが、食べると決めている時はめっちゃ食べます。ちなみにお酒も、呑むと決めている時はめっちゃ呑みます。そんな私なので、ご飯を美味しく食べられることは、QOLを高めるという意味で非常に重要です。人間が生きている間に食事をとる回数には限りがあると思うと、一食一食を大切にしたいし、毎度のご飯は美味しく食べたいというわけです。

さて、どんなことでもそうですが、料理も漏れなく“Practice makes perfect”です。自宅で過ごす時間が増えたことで、美味しいご飯を作るためにいくつかのスキルアップを試みました。まず、和食、中華、イタリアンの本をいくつか買ひまして、直感的に作ってみたい、食べてみたいと思うレシピを片っ端から、繰り返し作りました。繰り返しは本当に大切で、何度も作っていると、材料とか手順とかを覚えるようになります。これ、レシピを料理するたびにネットで検索していると、なかなか覚えるのが難しい。日頃、



著者が愛用している料理本たち（中でもウーウェンさんの本にドハマリし、プロデュースされたフライパンまで購入して愛用してます笑）

研究の本は全く読まないのに、なぜか料理では「やっぱ、本やな！」となるから不思議でした。それから、普段のご飯メニュー以外にも、自家製でキムチを漬けたり、塩麹という調味料を発酵させて作ったり、大量のジャムを作ったり、小豆を炊いたり、パスタや餃子の皮を捏ねて作ったり、時間がないとやってみる気の起きないことにも挑戦しました。おかげで、前

より美味しいご飯が作れるようになったり、品数が増えたりして、我が家の食卓は豊かになりました。

もう一つ、ご飯を美味しくしているのが一緒に食べる人の存在だと思います。パートナーでも友人でも、実家の家族でも、大切な人と食べるご飯は、1人で食べるご飯より、ダントツ美味しいです。ご飯を作る段階では、自分以外に食べる人がいるからこそ、美味しいご飯を作って喜ばせてあげようと工夫するし、種類豊富に作って驚かせようと努力します。「家族への愛情が料理を美味しくするための最高のスパイス」とは、まさに言い得て妙です。そして、ご飯を食べる段階では、作り手は美味しいと言われれば嬉しいし、わいわいお喋りしながら食べると、ただの白米と味噌汁でもなんだか美味しく、胸のあたりがほんわか温まる。石井君は好き嫌いがなく、味にうるさくないので、何でも美味しい美味しいと言って食べてくれます。叱って育てるタイプの私と違って、彼は褒めて伸ばすタイプの人なので、作ったご飯のことで批判されることはありません。おかげで伸び伸びと、色々な料理に挑戦できます。褒めるのは、叱るより効果的かもしれないと自分の教育方針を見直すきっかけにもなりました。料理の思わぬ副産物かもしれません。

さて、来年度、私は研究休暇をいただくことになっています。普通にお仕事をしている人からすれば奇妙だと思いますが、研究者には、授業や会議などの研究以外の業務が全て免除されて、研究に専念する期間として1年から2年のお暇をいただけるという制度があります。本来なら海外に滞在して、現地の大学に訪問できるチャンスなのですが、このご時世なので断念して日本で過ごす予定です。ゼミもない、会議もない、4月以降何も予定がないというのは、怠け者の私には非常に恐ろしい事態です。料理の腕ばかりに磨きをかけないように気をつけないといけません。研究者としての目標を改めて見つめなおし、ここから数年先のキャリアを豊かにできるようにコツコツ努力したいと思っています。

最後に、今年のタイトルの百人一首は「君がため春の野に出でて若菜摘む わが衣手に雪は降りつつ」です。大切な人の健康や長寿を願って、まだ寒さの残る春の野原に出かけて野草を摘んで贈ってあげた時に読まれた歌です。ここ

でいう若菜は、春の七草のような葉にもなる野草のことらしいです。古来、人は自分のためではなく大切な誰かのために、食べるものに気をかけてきたのだと思いを馳せると、やはり大切な人への気持ちがご飯を美味しくする最高のスパイスだと納得する次第です。



向日葵だらけの夏の野@兵庫県佐用町  
(右は著者、左は第10期の石井くん、撮影は小野先生)

## めんどくさい先輩

第8期OB 黒沢 祐介

このエッセイの筆をとったのは、2020年2月1日です。そう、OB・OG会が開催されたその日です。毎年後輩からOB・OG会誌の執筆依頼をいただくものの、年末は諸々やることがあったり（正直、そこまでではない）、やる気をなくしたり（こっちの方が正直なところ）で、ろくすっぽ書けていませんでした。なので、忘れぬようやる気があるうちに、鉄は熱いうちに、ということで今年はOB・OG会が終わった直後に筆をとった次第です。

さて、しばらく会誌を書かないうちに、僕も今年で33歳。会社では「若手です!」という歳でもなく、ゼミでも若めのOB! というわけでもなく。そこそこいい歳になりました。そんな歳になったから、すごく不安になることがあるんです。あれ、もしかして自分、めんどくさい先輩になってないかな、と。できればいつまでも後輩に好かれるような先輩でいたい、いや、わがままは言わない、めんどくさい先輩とは思われたくない、と。現在そして将来も自己点検できるよう、後輩に接するときに留意したいポイントをここに記しておくこととします。

### ◆ポイント①：自分語りは控える

きっと僕は「かっこいい先輩」を演出したいのでしょう、お酒の場で自分の武勇伝や武功を語るが多くなってきたように思います。確かに会社の先輩の成功体験を聞くのは有益なこともまあある一方で、会話の流れに沿わない武勇伝を一方的に放り込む、同じ話を同じ後輩に何度もしてしまうというのは、「かっこいい先輩」とは言い難いですよ。そう分かっているものの、気遣いのできる後輩が「さすが!」等、合の手を入れてくれたりすると、気持ちよくなってしまって、つい。気を付けます。

### ◆ポイント②：適度に後輩に話を振る

せっかくの後輩とコミュニケーションを取る機会を頂戴しているというのに、「ずっと俺のターン!」と言わんばかりにしゃべり続けてしまう。コミュニケーションなのに一方通行。これもまた「かっこいい先輩」とは違うと思っています。

### ◆ポイント③：お会計は少しだけ多めに出す

上述の2点は酔っぱらっているとできないこともあります。これは意識すれば必ずできるはず。①②ができない（自分語りばかりして1人でしゃべり続けている）、かつ、きっちり目の割り勘ともなると、後

輩的には「話つまらなくて相槌頑張ったのに有料かよ！」となるので、1 番注意したいポイントです。なお、このエッセイは 2021 年の OB・OG 会誌で出されるものかと思いますが、今年は残念ながら WEB 開催ですので、奢れないですね、残念です。来年以降、たかってください。

改めて書いてみると、すでに結構当てはまる部分が多くて、恐ろしい限りです。少なくとも、めんどくさくなってしまったときに、後輩から「先輩、めんどくさいっすね (真顔)」みたいなことを言いやすい先輩にはなりたいものです。やっぱり、自分至らないな、と気づくことが何事も第 1 歩ですから。

最後になりますが、1 つだけ。本エッセイの執筆にあたり想像した「先輩」というのは、もっぱら会社の諸先輩を想定して記載した内容であって、ゼミの先輩は一切関係がありません、ということを申し加えておきます。



中学の同級生と（この後酔っばらってめんどくさいヤツになった著者は右から 2 番目）

## 博士

第9期OB 竹内 亮介

少し前の出来事となりますが、2019年11月に晴れて、博士号の学位を取得することができました。直前に竣工したばかりの新・日吉記念館が会場ということもあり、2020年3月の学位記授与式を楽しみにしていたのですが、やむを得ず、新型コロナウイルスの影響で式は中止となりました。しかし、その代替措置として、YouTubeの慶應義塾オフィシャルチャンネルでライブ配信が行われることになり、その様子をスマホで眺めるという形で式に参加することはできました。これはこれで、2020年ならではの特殊な思い出になっております。

博士という言葉からは、ある専門分野について「何でもよく知っている」という印象を思い浮かべる方々も多いかもしれません。確かに、小野ゼミに入会した2011年の自分、大学院に進学した2013年の自分と比較すれば、数年を経た今、専門分野について知っていることは飛躍的に増えました。ところが、多くのことを知るようになると、それまで存在にすら全く気付いていなかったことが、芋づる式で現れるようになります。実際は、以前から存在していた知らないことが明確になっただけなのですが、感覚としては、数年の間で、知らないことも飛躍的に増えたような気になるのです。

こういった理由から、博士なるものは、「何でもよく知っている」状態からは程遠いですよ、というのが当事者としての率直な見解です。学ぶべきことは本当に尽きません。これからも、「何でもよく知っている」状態にほんの僅かでも近づこうとしては遠ざかる日々の繰り返しがあるのみですが、そんな終わりのなき一進一退と向き合っていきます。



新時代の学位記授与式（会場は新・日吉記念館）

## 近況報告

第9期OB 渡邊 光平

こんにちは、9期の渡邊光平です。皆さんお元気ですか？僕はやはり元気です。近況を報告しますと、2020年の4月から、株式会社アマナのフォトグラファーとしてデビューしました。さらりと言い放ちましたが、これが僕の中では大事件で、2015年に2年勤めた静岡銀行を退職したのち、専門学校桑沢デザイン研究所に入学、2年間グラフィックデザインを勉強しながら青山スタジオという撮影スタジオでアシスタントを約1年半、専門学校卒業と同時に青山スタジオを退社、株式会社アマナに27歳で新卒入社。アマナで3年間のフォトグラファーアシスタントを経て、やっとの思いでカメラマンになりました。30歳。やっとならスタートラインって感じです。アマナは広告代理店/制作会社で、ストックフォトで有名な会社ですが、それはあくまでサイドビジネスで、根幹にあるのは広告制作。特に、写真で成長してきた会社で、業界ではアマナのフォトグラファーという、一目置かれる存在です。そんな、アマナのフォトグラファーに漠然と憧れて27歳にしてアシスタントとして入社したものの、フォトグラファーアシスタント、謂わゆるカメラシという職業はこれがもう本当に涙も枯れるほど大変で…。通常だと4、5年かかってもほとんどの人はアシスタントからフォトグラファーに昇格できずに辞めていく狭き門を、なんとか3年で通過することができました。これは僕の人生でもなかなかの大事件です。だれでも名乗れば今日からフォトグラファーになれるこの時代に、あえての逆張りで、1から修行して、というのは精神的にも年齢的にも非常に辛いものがありましたが、今は楽しく広告カメラマンとして生活しています。写真だけでなく映像ももちろんやるのですが、今思うと、これって小野ゼミにいた時にはじめてのことなんですよ。当時は、小野先生や8期の真央さん、黒沢さんとか、同期のりんちゃんなんかと、ゼミでの飲み会とか行事とかをただ楽しく撮っていたり、りんちゃんの送別会で竹内くんと映像をつくったりしていただけなんですけど、これが自分の職業になるとは、当時は思いもしなかったです。ですが、たしか3年生の時、8期先輩の奥野さんと中村あずあずさんが、こうへの写真いいよねって、ぼそっと言ってくれたこと、本人達は覚えてないと思うんですが、それがどこか心の支えとなって、ここまで続けてこれたように思います。…ですが、最近の興味関心は専ら音楽。もともとバンドで音楽を続けてきたのですが、この1年ほどで音楽制作、プロデュース、エンジニアリング等を少しずつ手がけるようになり、ここ最近仕事として音楽制作を受けることが増えてきました。楽しいですね。僕の近況はこんな感じです。みなさんとの再会を楽しみにしています。それでは。



自宅の制作スペース。  
何屋なのかももう自分でもよくわかりません。

## #大学教員の日常も大変だ

第10期OB 石井 隆太

世界中のあらゆる人々がコロナウイルス拡大の影響を受けているわけですが、ここ大学業界の人々も例外ではありません。2020年4月には、例年どおりの授業スタートは切れず、大学生はもちろんのこと、大学教員や事務職員も自宅待機を命じられ、オンキャンパス授業（対面授業）から、オンライン授業（遠隔授業）へと移行しました。感染が収束傾向にあった秋以降は、ゼミをはじめとする一部の少人数授業には、オンキャンパスを取り入れつつ、その他の講義形式の授業は、リアルタイムの遠隔授業ないしオンデマンドの動画配信を継続した大学・大学教員が多数だったように思います。SNS上においては、「#大学生の日常も大事だ」というハッシュタグのもと、小中高と異なり、大学のみが遠隔授業を続けていることに反発する大学生がいる一方、対面授業を部分的に再開すると発表したら、「#大学に行きたくない」というハッシュタグのもと、旅行や飲み会を平気で続けている大学生と対面で接したくないと主張する大学生もいました。実際、対面授業と遠隔授業のどちらを希望するかについて、大学生にアンケートをとってみると、概ね、半分ずつという結果になることが多いようです。どちらを希望しているにせよ、完全に満足いく大学生活を送れなかった大学生が多かったことでしょう。

苦しんだのは、大学生だけではなく、大学教員も苦労しました。学生の顔すら見たことのない状況で、どんなスピードとレベルで授業を進めてよいか分からずに悩む新任教員から、過去30年間、板書で講義を進めてきたけれど、遠隔授業に伴ってパワーポイントを準備しないといけなくなったベテラン先生まで、四苦八苦しました。かくいう私も、オンデマンド動画配信の授業では、録画ボタンを押していないことに気が付いて撮りなおし、録画途中で宅配便が来て撮りなおし、挙句の果てには、ビデオ配信の設定を誤って配信できず、そんな日々でした。「#大学教員の日常も大変だ」と言ったところでしょうか。

さて、今年度は、そんなコロナの影響で激動の1年だった一方で、私にとっては、大学教員2年目という意味でも激動の1年でした。激動だったのは、研究・教育活動で色々とチャレンジできた充実した1年だったからです。下記では、その中でも、論文執筆とゼミ教育の2点を振り返ってみたいと思います。

### ◆英語論文がアクセプトされました！

この読者の皆さまの多くは、小野ゼミに入会し、三田論や卒論に取り組んでいる最中には、英語で書かれた既存研究を読むことが多かったのではないのでしょうか。私も、三田論チームの発足後、はじめに読んだ論文は、英語で書かれたものでした。当時の自分に、その内容がどれだけ理解できていたのかはかなり怪しいのですが、何となく「凄いなあ」と思ったことは記憶しています。斬新な研究アイデアについて

英語というグローバルな言語で書かれていて、公刊された論文が、自分と同じように世界中の人々に読まれているということに、感銘を受けたのではないかと思います。そんな原体験があるため、自分も、いつかは何とか英語で論文を書きたいなあと考えていて、博士課程に進学してからは、英語での論文公刊を目指してきました。しかし、そんなに沢山の論文を書いた経験がなく、論文執筆自体に不慣れなのに、英語という語学の問題も加わってしまい、論理と語学の二重苦に悩まされました。結果として、小野先生には、沢山のご迷惑をおかけしてしまったのですが、先生のご指導の甲斐があって、2020年の間に、3本の論文が、海外の学術雑誌でアクセプトされるに至りました。英語論文であれば、世界中の研究者の中から選ばれた、自分の専門と極めて近い研究者に査読審査を担ってもらうことができ、審査の過程でもらえるコメントやアドバイスは、どれも非常に役立つものでした。論文をどの言語で書くのかは、研究の本質とは全く無関係ですが、英語で論文を書き、海外雑誌に掲載されることで、世界中の研究者たちとコミュニケーションを採ることができるのは、とてもエキサイティングです。これからもコツコツと書き続けようと思います。

#### ◆ゼミの2期生を迎えました！

今年度から、石井ゼミ2期生8名を迎えました。昨年、2期生を募集する際には、「英語論文の輪読」と「実証分析の実施」の2点を、ゼミの特色としてアピールしました。そんなエグそうなことを謳っているゼミは、他にありませんでしたので、学生にとっては応募のハードルが高かったように思いますが、それでもやる気のある8名が入会してくれました。しかしながら、周知のごとく、コロナ禍で



ゼミ2期生とゼミコンの表彰式にて（著者は後列右端）

夏休みまではオンラインゼミになってしまいました。夏休みが明けて、10月からは、福井ではそれほど感染者が出ていなかったため、大学の方針に従って、12月まではオンキャンパスにてゼミを実施しました。2チーム体制でグループ研究に取り組んで、12月に開催された学内の合同研究発表会（正式名称はゼミナールコンテスト、通称“ゼミコン”）では、優勝、準優勝、審査員賞と、有難いことに数多くの榮譽に浴することができ、地元のラジオにも出演することになったようです。ゼミでの経験を1つの自信にしてもらって、就職活動を頑張りたいと願うばかりです。

さて、末筆になりますが、来年度からは、2年間お世話になった福井県立大学を出て、立命館大学の経営学部に移籍することになりました。第7期OGで妻の菊盛さんと同じ職場になります。文字どおり公私共々、仲良く楽しく頑張りたいと思います。

## 剥がれかけの鱗

第13期OB 川村 澄明

今年のOB・OG会誌は何を書こうか、去年は『風立ちぬ』の紹介みたいなエッセイだったから、もう少し仕事の内容でも掘り下げてみようか、などと考えていたら、1つの大きな後悔が頭をもたげてきました。そう、せっかくアニメ映画の話だったのに、アニメ聖地巡礼のことに何1つ触れてない！何を隠そう、第13期英論チームは、このアニメ聖地巡礼をテーマにした論文を執筆し、四分野インゼミ、さらにはGMC@香港、ICAMA@中国といった国際学会での発表も行っているのです。にもかかわらず、自分でアニメ映画を題材にしておきながら、そのアニメの聖地に触れないというミス。コロナ禍の中、旅行も憚られるご時世ではありますが、諸々落ち着いたタイミングで旅行を計画いただく際のインプットになればと思い、ちょっとだけ調べてみました。ジブリ作品は、制作サイドが聖地を明言しないことで有名ですが、中でも2つだけ、精度が高そうな聖地候補がありましたので、紹介します。

1つ目は、草軽ホテルです。主人公の堀越二郎とヒロインの里美菜穂子が再会した場所になります。こちらは、長野県にある、上高地帝国ホテルがモチーフになったのではないかと推察されています。パラソル付きのコテージはないですが、確かに、赤い屋根と木で覆われた壁という特徴的な要素を備えています。



アニメ



聖地候補（上高地帝国ホテル）

2つ目は、主人公が自らの身を隠すために利用していた、上司の黒川家の離れです。これについては、熊本県にある前田家別邸の草枕記念館が聖地の候補として有力だそうです。確かに、縁側の風景や、扉の小窓の形が酷似しており、参考にしていただけた可能性は高そうです。ちなみにこちらは、夏目漱石の『草枕』の舞台となったことで以前から有名で、スタジオジブリの社員旅行先にもなっていたとのこと。



アニメ



聖地候補（前田家別邸）

以上、『風立ちぬ』の聖地候補の紹介でした。コロナ禍が落ち着いた際には是非、聖地巡礼に行って、地域を盛り上げてください！

聖地候補の紹介にページを費やしすぎてしまいました。最後に、本当に書きたかったことで、最近涙した話を一つ。これもまた映画の話になるのですが、今度は実写で、『糸』という作品のワンシーンです。あんまりネタバレするものよくないので、詳細な説明は省きますが、劇中で成田凌が歌う『ファイト』に泣かされました。「闘う君の歌を～」というサビ部分はあまりにも有名ですが、その他の歌詞までちゃんと聞いたのは、この映画が初めてだったことも涙した一因かもしれません。個人的に、中でも特に以下のフレーズが、胸に深く突き刺さりました。

「暗い水の流れに打たれながら魚たちのぼってゆく。光ってるのは傷ついて剥がれかけた鱗が揺れるから。」

途方もなく疲れて、時にがんばる意味さえ、見いだせなくなってしまうこともあるけれども、そんな剥がれかけの鱗でも、傍から見たら光っていることもあるのかと、また、自分からは光って見えるあの人も、暗い水の中をかき分けて傷つきながら進んでいたのかと。40年前から歌われ続けているこの歌詞によって、そんな可能性に気づかされ、そしてまた励まされました。容易に見失ってしまいがちな、がんばることの意味が、実はすぐそこにあるんだということを、まざまざと見せつけられ、それと同時に、自分のこれまでの努力が、同じように暗い水の中をくぐってきた先人たちがいたという事実によって、認めてもらえたような感覚に陥ったために、不覚の涙を禁じえなくなりました。映画『糸』がおすすめだよということの他に、何が言いたかったのかと言えば、コロナ禍で大変な時期けれども、疲れて諦めなくなる時もあるけれども、私は元気にがんばってるよってことです。皆さんにとって、この1年はどのような年だったでしょうか。



映画『糸』より、ファイトを熱唱する成田凌

## インドア趣味、始めました。

第13期 OG 山本 彩理

ご無沙汰しております。13期の山本です。みなさま、いかがお過ごしでしょうか。

山本は、相変わらずです。相変わらず、仕事中心の生活をしており、その仕事内容もほぼほぼ社会人1年目から変わらず、毎日を過ごしております。唯一、私の生活で変わったのは、プライベートの過ごし方でしょうか。昨年までは、休暇の度に旅行や、キャンプなどアウトドアな行動をし、ストレスを発散していたのですが、このご時世でそれができなくなってしまったので、インドアの趣味を新しく始めましたので、ご紹介します。

### ◆デッサン、始めました。

仕事柄、クリエイティブな方とお仕事を共にすることが多いのですが、自分にはその能力が全くないことに薄々気づき始めたので、絵の教室に通い始めました。元々美術は好きだったのですが、絵心はなく、基礎から学びたいと思い、デッサンのコースを受講しています。週に1度、週末に3時間で、与えられた・自分が選んだ静物を描いています。3時間で描き上げる、ということもあり、集中力が必要になるため、これが想像以上にストレス解消になっており、非常に有意義な時間となっています。金曜日について、「明日は土曜日だから、遅くまで寝られる」と思って、週末の半日を寝て過ごし、後悔されている方(私も長らくそのような思考をしておりましたが)、絵の教室おすすめです。必要最低限の会話を交わすだけなので、非常に今の時流に合ったお稽古かと。ご検討くださいませ。



筆者の作品。ボトルもグラスも透明感を出すことが難しかった。(2020年8月撮影)

◆手芸, 始めました。



著者の作品その2。しっかりと撥水加工の布を選び、自分の身体に合わせて作る。

(2020年7月撮影)

た甲斐があるな」と毎回しみじみ思います。一時期は布マスクをつくるのが流行りましたが、お時間がある方は、ぜひ、マスクだけでなく、大きなアイテムにも挑戦してみたいと思います。楽しいので、ぜひ。

◆「テーマ飲み」始めました

巷ではオンライン飲み会が流行っていましたが、私もお酒を飲むことが好きなので、友人たちとオンライン飲み会を実施しております。ただ、飲み会を開催するメンバーは、“いつメン”となることが多いため、私は最近友人たちと飲み会をする際には、テーマ飲みをしています。時には、「鶏料理」「魚料理」「野菜たっぷり」といった食材縛りの時もあれば、「ベトナム料理」「沖縄料理」といった国縛りのときもあります。これがまた人によってつくる料理に癖が出るので、とても楽しく、飲み会冒頭の30分は、お互いに何を作

元々ファッションは好きなのですが、お気に入りの洋服のボタンをなくし、かわいいボタンを探すために、日暮里の繊維街に行ったことがきっかけで、手芸に対して興味を持ち、始めてみることにしました。気に入った布とパーツを準備し、YouTubeの「HOW TO」コンテンツを参考にしながら、自分の思い描くものをつくることは非常に楽しく、作品ができるたびに、うれしくなります。中学生の家庭科の授業はおしゃべりタイムと考えていた私にとって、また基礎から学ばなければならぬハードルはありましたが、それでも出来上がったものを見ると、「頑張っ

ったか、どこがポイントか、を説明しながら、食レポも行う（気分は完全に YouTuber。笑）という茶番をしながら、楽しんでおります。なかなか、外出して会う機会が減ってしまったので、コミュニケーションが希薄になってしまいがちですが、かといって同じメンバーで何度もオンライン飲み会をしても、会話が尽きると思いますので、そんなお悩みを抱えられている方にはお勧めです。ぜひぜひ、やってみてください。



テーマ飲み会

そんな感じで、私の2020年は、インドアな趣味を開拓し、終了しました。まだまだコロナの感染は終息する気配がないので、2021年も変わらず、インドア趣味を極めていこうと思います。みなさまもどうかお体をご自愛下さいませ。またお会いできる日を楽しみにしております。

## FPS ばかりやってきました すみません

第 16 期 OB 北澤 涼平

この会誌におけるエッセイの意義は、卒業後、世界の様々な場所で活躍する OB・OG の諸兄姉が、互いの近況を報告しあうことにある。だがしかし、万年ニートの私が今年度したことといえば、ゲーム（と勉強）だけであるため、何も書くことがない。果たして、どうしたものか。ゲームについてならば、ワード 10 枚分くらい、FPS やホラーゲームの魅力を語ることもできるのだが、如何せん、誌面違い感がすごいため、自制しよう。唯一ここに書くことができそうな、我が相棒である岩間君とともに 9 月に行ったセルビア学会発表（という名目の海外旅行？）も、すでに小野ゼミの HP に、この発表に関する記事が掲載されているため、内容が重複してしまい面白くない。

そんなわけで、面白みに欠ける自分の近況のために、書くネタがなく八方塞がりであったのだが、思惟してみると、自分がこの 1 年間でオンラインゲームにどっぷりハマったことと、コロナ禍の間に何か関係があるような気がしてきた。言うまでもなく、人間は社会性という特性を有し、オンラインとオフラインという 2 つの方法を併用して、他者と関係を構築しながら、生活をしている。そして、この自粛期間に、オンラインでのインタラクションが爆発的に増えた気がする。もちろん、オンラインでのインタラクションなんて遥か昔から存在しているし、さして珍しいことでもない。私が言いたいのは、このインタラクションが、コロナを機に、さらに高次元化（というか深化）しているということである。つまり、誰かが発信した情報を、やりとりするだけに留まらない、より深い関係づくりの場としてのオンライン世界が、万人に開かれるようになったということである。私にとって、そうした他者との関係づくりの場が、オンラインゲームであったというわけである。また、私だけでなく、周囲にも、こういった変化は見受けられるようになった。例えば、3 人（3 組）の私の友人が、このコロナ禍で、各々自身の YouTube アカウントを開設し、動画を配信している。彼らの動画配信の第 1 目的は、決して金銭的利益ではなく、他者とのインタラクションにあるらしい。この傾向は、人類の発展に寄与するであろうし、時代の転換期にあって、新しい価値観や生き方が産声をあげる瞬間に立ち会っていることには、喜びを感じる。こうした、コロナがもたらした怪我の功名ともいうべき産物は、ほかにもあるであろう。辛い状況の只中であっても、何か楽しみを見つけて、平和に過ごしたいものである。

最後に、幾星霜を経て、このエッセイ（というか評論文みたいな感じになってしまった）を読み返した時に、「こんなこともあったな（笑）」と笑い飛ばせるような未来がくることを切に願い、祈りを込めてこのエッセイの結びとする。※なお、書くネタがなかったことについては、表題の通り、私は非常に反省しているので悪しからず。

## 想像が創造する世界

第16期 OG 土谷 鈴

店に入ると、何だか懐かしい「戻ってきたなあ...」という感じがする。そこには、フレッシュさと元氣溢れる第18期生と、先輩らしい大人びた表情をした17期生、ほろ酔い状態の岩ちゃん、涼平、やなー、そしてそんなみんなを温かく見守る小野先生の姿がある。岩ちゃんと涼平は相変わらず議論の余地があるのか分からない内容の真偽について語り合っているし、やなーは例の如く斜め上を見ながら、「いやあ、(仕事) ヤーバイ...」を連発している。それでもやなーがバリバリビジネスマン色に染まっているように見えるのは、スーツが身に馴染みすぎているせいだろうか...。そんな状況をニヤつきながら見ていると、岩ちゃんがビールを頼んでくれて、みんなと乾杯！ ビールはあまり好きではなかったが、仕事終わりに飲むと心なしか美味しく感じる。そして、18期が楽しそう話してくれるゼミの近況を聞いているうちに、はるえとはるかが一緒に到着。はるえは社会人1年目とは思えないくらいバリキャリ感を醸し出しているし、はるかは相変わらず見ているだけで幸せになるくらい楽しそうだ。久々に16期が集まってきて、テンションが上がってお酒が進んでしまう。ああ、もう酔っ払ってしまった...。そうこうしていると、会社の人たちとの1次会を終えたりさが到着。さすが、「もう先輩じゃん？」というようなオーラが出ている。

そうこうして、23時を越えようとしている時、広島から新幹線で来たけいとが滑り込み到着。どうやら新幹線の中で1人で飲んでいたらしく、すでに酔っ払っている。「え？ 16期は全員2次会参加でしょ？」と言いながら、「今から9人(小野先生+16期)入れます？」と、2次会のお店を勝手に押さえている。久々に全員集まったことだし、みんなで楽しく2次会をしていると夜も更けて...

...と、ここまでは想像上の話。「こんな世の中じゃなければ、こんな社会人1年目だったはずなのに！」という想像上の世界の話だ。しかし、ここまで鮮明に2020年度の小野ゼミのことを想像できるのは、それだけ小野ゼミと濃い時間を過ごしてきたからこそのことだと、改めて深い絆に気づかされる。

2020年は、コロナの影響で、“会いたくても会えない”，そんなことがたくさんあった年だった。しかし、そんな状況だからこそ、会いたい人たちのことを想像する機会が今までになく多い年でもあった。「小野先生は元気かな」「18期はどんな雰囲気の人たちなのかな」「17期はどんな先輩になっているのかな」「16期はどんな社会人(またはニート)1年目を過ごしているのかな」「まだ会ったことのない会社の人たちはどんな人なのかな、実は首から下はすごく太っていたりするのかな」そんなことを常に想像していた。そして、想像の力は想像以上に強く、冒頭のように深い絆に気づかせてくれたり、後述するエピソードのように、深い絆を新たに生み出してくれた。

そのエピソードは、新人社員研修でのこと。私が就職した会社には、先輩社員2人を含めた9人のメン

バーで構成される、新入社員研修班というものが存在する。そのメンバーは、本来であれば毎日一緒に研修をし、飲み会をし、研修中のほとんどの時間を共に過ごす仲間のはずだった。しかし、今年はメンバーに会うことは許されず、毎日リモート上でしか会うことができなかった。そんなメンバーで迎えた研修最終日、先輩社員の計らいで、「卒班式」という名の会がリモート上で開催された。みんなで君が代を歌い、「僕たち、私たちは、本日ももちまして研修班を卒業します。全員：卒業します！」という卒業式恒例のヤツを行い、最後は1人1人が班のメンバーへの想いを述べた。メンバーへの想いを述べているうちに、毎日のようにお互いのことを想像して、夢にまでお互いが出てきて、こんな状況でありながら、想像上の世界で毎日会って、メンバーの間に深い絆が生まれていることに感動し、全員でPC画面の前で大号泣した。メンバーに実際に会えないことはもちろん悔しかったが、想像が創造する世界が持つ力は、その悔しさを打ち消すくらい大きな力だった。

さて、ここで未来のことを想像してみる。2021年度中には、小野ゼミの仲間と一緒にたくさん飲みに行き、会社の先輩たちとゴルフに行き、仕事で担当している放送局の方々とたくさん旅行に行き、色々な人たちと一緒に美味しいご飯を食べに行き...。今日も私の想像が創造する世界は、とどまるところを知らない。



ずっと会いたかった研修班のメンバーと初めて会えた日（著者は左から3番目）

## これが私のニューノーマル

第16期OB 柳原 慎平

小野先生，OB・OGの皆様，大変ご無沙汰しております。流通業域の営業志望で某IT企業（業界では、『元請』と呼ばれる会社）に入社して，「流通領域の営業職」という配属希望に反して，「化学領域のシステム・エンジニア職」（以下SE職）として初年度配属された柳原です。某化学メーカー様の基幹システム（別名ERP）の導入・開発プロジェクトにアサインされ，目下，プログラムのソースコードと設計書を参照して，バグの原因特定および改修を協力会社（別名一次請）に依頼する業務に従事する毎日です。日々，化学領域のSE職としての業務経験を積む一方，システム製造自体に興味がありません。管理職に対して「システム製造には興味ないので，システム導入の企画・構想業務がやりたい。」などと主張しているものの，上長は（建前上），「営業志望するだけの十分な理由があるのにSE職配属というのは初耳。」と理解を示す一方，「キミが志望する開発上の上流工程をやるには，システム製造業務を十分経験している必要があるね。」と諭されるので，向こう10年は，SE職継続の見込みです。当社のSE職には，ジョブ・ローテーション制がなく，多くの社員は初年度に配属された業界領域を担務して会社員生活を終えます。『配属ガチャ失敗』と言わざるを得ず，残念！

そんな私の『ニューノーマル』は，朝8時に顧客先プロジェクトルーム<sup>1</sup>に出勤して，夜9時に帰宅する，月残業時間40時間以内の日々です。『原則テレワーク』の全社方針には反するものの，年間残業時間「720時間以内」という壁に直面していないこと，『サビ残』がほぼゼロなことに鑑みると，会社員としては「ホワイト」な部類です。仕事終わりの付き合いでの飲み会や，上司・取引先との休日ゴルフ・接待業務などはほぼなく，休日出勤も（今は）無いのでホワイトな会社員生活を存分に満喫しています。とは言え，大学生の頃から『ウェットな』会社員生活を思い描いていたので，コロナ影響があったとは言え，現況は少し残念です。ゼミ生時代は何かしらの飲み会が毎週ありましたが，入社以来，飲み会は2か月に1回ペースで，先輩社員とも同期社員ともほぼ交流できていません。顔が分かる同期社員は数



同期社員とのアメフト観戦（著者は左端）

<sup>1</sup> 別名，SE職へのタコ部屋。小野ゼミの活動で例えると，小野先生のご自宅に部屋を貸与いただき，その部屋で論文執筆活動をしているようなものです。

名なので、なかなか仕事の苦勞も共有できません。残念！

交流の少なさという面で言うと、小野ゼミにおいても同じです。小野ゼミの先輩・後輩が一堂に会する飲み会は1度もありませんでした。同期会も、卒業以来1回だけでした。<sup>2</sup>とは言え、16期との交流はちゃんと続いていて、木幡（第16期OB）が広島から東京に戻ってくる度に16期男子+エディさん（第16期OG）飲み会は都度開催されているし、はるか（第16期OG）とも数ヶ月に1度は食事をしています。各々忙しい中でも、近況報告やゼミ生時代の思い出話ができる仲間は、同期社員との交流の少なさも影響して、得難く貴重だと最近痛感しています。

18期生とももっと交流したいと思っていましたが、18期生のゼミ活動はオンライン中心だったようで、なかなか機会がありませんでした。聞くとところによると、18期生は小野先生と直接杯を交わしたことが無いそうです。つるの屋も、山食も、グル学も、ロー棟も、きっと18期生は未体験<sup>3</sup>なんですね。活動場所に捉われないのが、18期から始まっている『ニューノーマル』な小野ゼミなのかもしれません。集合できる活動場所を求めて、三田の街を彷徨った身としては隔世の感があるものの、小野ゼミが、コロナという時代の変わり目に直面してもなお、来年以降も、私のような大学生を受け入れ、大学生の成長を促す場として存在し続けるという価値が重要なのであり、細かい伝統を懐かしむようでは、今後は時代に取り残されていくのかもしれない。

以上、枯れ木も山の賑わい、と考えて取り留めもないことを書いてきました。「エッセイ書いてください。」とLINEを送ってきた、ゼミ長の芝田さん（第18期）に満足いただける内容であることを祈りつつ、『Ctrl+S』キーを打鍵した後、docxファイルの編集を終了します。



第16期男子 on 赤坂  
(左から著者、北澤さん、木幡さん、岩間さん)



新大久保で同期とキメ顔（左から著者、関口さん）

<sup>2</sup> 同期会の開催頻度は、コロナの影響が無くなれば現役生時代よりも増やしたいですね。

<sup>3</sup> つるの屋が閉店したり、山食がクラウド・ファンディングで資金調達したりする状況は、小野ゼミだけでなく、慶應義塾の伝統自体の危機だと感じます。ただし、18期生も徹夜はしたそうで、（良し悪しは別として、）小野ゼミの伝統は受け継がれていると感じます。

## 結婚・出産特集

### 里に実り咲くは家族なりけり

第8期 OB 荻野 真央

2020年はCOVID-19の影響で、皆様にとっても未曾有の年となりましたことと存じます。ご自身やご家族、周囲の方に感染被害に遭われた方がもしいらっしゃいましたら、心よりお見舞い申し上げます。

私におきましても、公私ともに多岐にわたってパンデミックの影響に悩まされた1年となりました。下記にて、それらを振り返りながら、近況報告とさせていただきます。

#### ◆仕事編：震撼する欧州

昨年のOB会誌にて、ポーランドの子会社の担当になった旨を記しました。1月に初めての出張をしたのですが、それから2ヶ月を待たずに、第一波が欧州を押し寄せることとなり、その余波は1年が経とうとしている今もお収まる気配がありません。ご存知の通り、欧州では感染者数ならびにそれに伴う政府規制が日本の比ではありません。ポーランドにおきましても、夜間外出の禁止やモール施設の閉鎖、店舗敷地面積に応じた来客人数の制限、飲食店での店内営業禁止など、強力な措置が断続的にとられることとなりました。直接的な営業禁止に追い込まれることのなかった菓子メーカーではありますが、衛生管理徹底による商品の安全・安定供給やとりわけ製造ラインにおける一次・二次感染の防止、事業計画の乖離と補正など、日本側からの後援業務ではありましたが、その対応に追われることになりました。

世の中の娯楽が大きく制限される中ではありましたが、改めてお菓子が世の中に貢献できた1年だったのではないかと思います（私も在宅勤務が増えましたが、ながら食べるの習慣がすっかり定着してしまい、気が付けば3kg近くも太ってしまいました…）。1日も早い事態収束を願いながらも、それまでの間、彼の地にて我々の商品が人々の心と小腹を幾ばくか満たしてくれれば是幸いです。

また、こんな状況下ではございますが、先日再び異動がございまして、今度はタイ担当として、コアラのマーチとトッポのブランディングと世界展開に従事することとなりました。久々の東南アジア担当で少しブランクがありますが、慣れ親しんだブランドに携われるのはやはり嬉しいですね。皆様が再び海外旅行に赴き、その地で私が手掛けた商品・広告を見ていただけるような日を夢見て、頑張っております。

#### ◆家庭編：女天下になっていく荻野家

一昨年に長女の咲実（えみ）を授かりましたが、みるみるうちに大きくなっております。まだしっかり

とは話せませんが、「りんご」や「アンパンマン」など、単語をどんどん覚え、流暢な『咲実語』を話しながら、必死で何かを訴えてくる毎日です。E テレにかじりつきの娘に付き合っているうちに、色んな歌やダンスを覚えてしまうのはきっと、私だけではないはずです。

そして、このコロナ禍ではありましたが、11月に次女の里咲（りさ）も授かり、4人家族となりました。感染対策のため、通院・出産立ち合いもできず、妻には不安な思いもさせてしまいましたが、母子共に元気で帰ってきてくれて、本当に良かったです。わんぱくな長女の子守をしながら、昼夜を問わず3時間おきに泣く次女の世話をするのは、まるで生命力を吸われるかのように大変な（ある意味小野ゼミを思い出さような）毎日ですが、彼女達が日に日に成長する様を見ると疲れも吹き飛んでしまいます。

この1年はろくに遠出や外食も出来ず、不自由な暮らしが続きましたが、家にいる時間や家族と過ごす時間が増えて、個人的にはとても幸せなものとなりました。とはいえ家族でお出掛けもしたいですし、頑張ってくれた妻を誘って美味しいレストランにも行きたいので、こちらも早くパンデミックが収束してくれることを切に願います。

本年はそんな状況の中、また、OB・OG会もWEB会議方式とのことなので、皆様に直接お会いすることができなかつたことが心残りです。小野先生や現役生の皆様も、本年度はゼミ活動をはじめ、大学生生活全般で大変難航されたのではないのでしょうか。感染対策は長期戦となり、辟易してしまうこともあるかと存じますが、この会誌や総会で心を晴らしながら苦境を乗り越えて、次年度にはまた皆で飲み交せるようになりたいですね。皆様とご家族のご健康とご多幸をお祈りして、また会える日を心待ちにしております。



長女の咲実。とにかく走り回ります。



次女の里咲。まだまだ小さいです。

## プロポーズをセルフプロデュース

第9期 OG 清水 鈴

小野ゼミの皆さん，こんにちは！

2020年はコロナで色々ありましたが，個人的にはとても良い1年でした，私事ですが，長年お付き合いしていた彼氏と事実婚をすることになりました。お付き合いしていた中で途中，お話しさせていただいたゼミのお友達には色々相談させていただいたこともあると思いますが，その彼が，かなり強い信念を持った方でして，結婚という制度に関して反対，夫婦同姓に関してもうーん，そもそも好きだったらわざわざ国に申請する必要ある？みたいな方だったので，結婚を望んでいた私としてはかなり頭を悩ませた数年でした。そこで私はなぜ結婚したいのかというプレゼン資料を作り，何度かの説得を経てなんとか了承を得て，そこから自分で彼のプロポーズをセルフプロデュースし，2020年末にやっとお互いパートナーとして生きていくということを決断しました！

なんだかここだけを聞くと大変だったね...と思われるかもしれませんが，私は私なりになんで結婚しなくても幸せになれるこの時代に，彼と結婚したいのか（ゼクシィ広告より）を考える良いきっかけを与えてくれたことに感謝しています。現在パートナーは愛知県で大学の先生をされていて，コロナのマスクなどの飛沫を研究するなどタイムリーなことをやっています。一方で私は今後も引き続き「清水」として変わらず大阪で広告のお仕事を続けたいと思っていますので，コロナが落ちついたらまたゼミの友達には直接会って色々お話しできたらと思っています！ 今後も宜しくお願いします。



著者は左，パートナーの彼は右になります。



大阪で夫婦共々仲良くさせていただいていた右二人は，第7期の菊盛さん，第10期の石井さんです。（著者は左端）

## "Hello, World ! "

第 10 期 OB 仙田 晃史

私の小野ゼミに関する最後の活動は、2015 年度 OB・OG 会への出席とエッセイの寄稿である。つまり、約 5 年もゼミ活動に顔を出していないということである。正直、これほど長い期間、ゼミの活動に参加できていないと、少しばかりの申し訳なさや気まずさを覚え、久しぶりに寄稿するエッセイに何を書けばいいのか悩む。改めて自己紹介をすべきか、近況を報告すべきか、はたまた何か別の話題について書くべきか。悩みに悩んだ結果、本稿では、5 年ぶりにエッセイを寄稿するに至った背景を執筆したい。

第 1 に、妻からのプレッシャーがあった。妻とはどういうことだ！？と思われた方もいるかもしれないが、ありがたいことに良縁に恵まれ、私、仙田晃史は、2020 年に入籍している。(昨今の状況を踏まえ、結婚式等の日取りは、未定であり、小野先生をはじめ皆様へのご報告がこのエッセイとなってしまう申し訳ありません。)以前から、妻には、小野ゼミについての話をよくしており、10 期 OB の久保川君は、妻とも面識があるのだが、その妻から、非常にやんわりとした口調で、エッセイを寄稿すべきとのアドバイスがあった。こんなに現役生が精力的に活動しているゼミなのだから、エッセイを寄稿するくらいのことは、OB として当たり前なのではないか、と。非常に耳が痛い。普段から、妻の尻に敷かれている私としては、「そうするよ。」以外の選択肢はなかった。

第 2 に、慶應の繋がりがって素晴らしいのに、その繋がりを自分から断とうとするなんて勿体なくね！？と今更後悔したからである。コロナ禍で利用者数が減少した山食をクラウドファンディングで多くの人が支援し、目標額を一晩で達成したというニュースは、塾員・塾生の繋がりの深さを表していてなんとも素晴らしい。(私も、もう 1 度、あのカレーを食べたいので、心ばかりの支援を実施。)また、私個人の過去を振り返ってみると、社会人になってからの辛い時期に救いの手をのばしてくれたのは、多くが大学時代の友人や先輩であった。自分にとって、1 番身近に大学を感じられる場所は、この小野ゼミであり、1 年に 1 度定期的に参加している OB・OG 会への出席やエッセイに寄稿しないことは、その繋がりを断つ愚行に感じられた。

久しぶりに活動に顔を出すというのは、非常に気まずい。今まで何をやっていたのか、と怪訝な顔をされるかもしれない。誰？と冷ややかな目を向けられるかもしれない。しかしながら、ソルジャーとして社会人人生を生き抜いて来た我々であれば、それくらいの仕打ちには平気な顔で耐えられよう。

久しぶりのゼミ活動に「Hello」と言って参加しようではないか。



著者近影 左側は妻

## コロナ禍での結婚式

第 11 期 OB 立松 宗磨

2020 年はコロナ禍ではありましたが、なんだかんだ様々な個人的イベントがあったのでこの場を借りて報告させていただきます。最初に仕事はというと、3 月中旬にインドネシアでの語学研修・実務研修を終えてインバウンド需要が消滅してガラガラになった飛行機で帰国した後は、勤務体制が完全在宅勤務（～5 月）→週 1 回出社（6～8 月）→週 2 回出社（9～12 月）→週 1 回出社（1 月～）と推移する中、インドネシアでの三菱自動車事業を担当しております（仕事の詳細は割愛します）。

### ◆結婚

2020 年 10 月 10 日（土）、Go To Travel の対象地域に東京も追加され世間の雰囲気は今よりはるかに？ 穏やかな中、結婚式・披露宴を執り行いました。妻はサークル（ソフィア）の同期です。当日は勤務先の病院から列席 NG を言い渡された医者等の友人等数名の欠席者はありませんでしたが、約 85 名の方々に列席頂くことができました。SNS 上には結婚식을延期したという投稿があがり、（非常に偏った意見だとは思いますが）イベントや結婚式に関する Yahoo ニュースのコメント欄には「こんなご時勢に結婚式を開催するなんてありえない！ 自分だったら絶対開催しないし、誘われても行きたくない」というような刺激的なコメントも多いご時世でしたが、ホテル側にも様々な感染対策を実施頂いた結果、無事感染者ゼロで人生の一大イベントを終えることができほっとしたことがずいぶん昔のように感じます。結婚式・披露宴にはゼミ同期の男子メンバーのほとんどが、2 次会には女子メンバーも参加して下さい、加えて 2 次会幹事はゼミ同期の伊礼と優輝に依頼し準備・本番を共にする等、ゼミ同期メンバーと多く交流できたのも良い思い出です。



披露宴でのゼミ同期メンバーとの 1 枚。上段左から、石塚さん、佐藤和也さん、内藤さん、佐藤優輝さん、住田さん、伊礼さん。著者は下段左

### ◆マンション購入

コロナ禍で中々友人と会う機会もなかったものでほとんど話していませんが、マンションを購入しました。新築で入居はまだしばらく先ですので、今は賃貸暮らしです。いつ海外転勤があるかわからない中でマンションを購入するのはどうなんだろうとこれまでは躊躇していたのですが、結構な金額の家賃を費用として支払うのが勿体なく、加えてせっかく銀行が多額のお金を住宅ローンという名の超低金利で貸してくれ

るのにも関わらず、これをずっと使わない手はないということでようやく決心し（あと4年早く動きたかったのが本音ですが...）、色々と調べた結果、とある駅直結のタワーマンションを幸運にも抽選で勝ち取りました（マンションに詳しい方ならここまでの情報でかなり候補が絞れます笑）。マンションにハマり購入後もマンション情報に日々接しているの、是非自宅購入に興味のある方、1度お話ししたいです。ちなみに、入居までに海外勤務となり自分が1度も住めない可能性も十分にあるということで、自宅は買ったら基本ローン完済・一生住むという昔ながらの考えを持つ両親とは中々意見が合いませんでした、押し切りました。

#### ◆Go To Travel を使い倒す

結婚式後は Go To Travel の恩恵を多分に預かりました。これまでは国内には見向きもせず海外ばかり行っていたのですが、幸か不幸か国内旅行しか行けなくなり、新婚旅行もニューヨーク・カンクンの予定でしたがやむなく無期限延期となり、それならばということで2020年は結婚式後の2ヶ月半だけで北から函館、箱根、関西（京都・大阪・神戸・姫路）、屋久島、沖縄（本島・石垣島・竹富島）と、限られた時間でよく旅行しました。どれも違った良さがありましたがおすすめは竹富島で、時間がゆったりと流れ日々の喧騒を忘れることができました。どうやら今年のGWも海外には行けなさそうで、さてどうしたものかと考えております。毎年のことですがスペースが余ってしまったので、写真で稼ぎます！



竹富島での1枚。  
星のや竹富島おすすめです！



屋久杉。ここまでの道のりが長かった...



函館の夜景。  
絶景でしたが寒すぎて手が激寒でした。



屋久島はもののけ姫の  
舞台になったようです。

## 人とつながる大切さ

第16期 OG 平間 遥絵

皆様、ご無沙汰しております。第16期OGの平間遥絵です。本エッセイを執筆するにあたり、月日が経つその早さに驚いています。同期と毎日のように集まり、OB・OG会誌の書式チェックに追われていたちょうど1年前の日々がとても懐かしく感じます。当時の私たちにとっては、毎日学校に行くこと、同期と会って会話をし、何気ないことで笑いあったりすることは、特別さの欠片もない、当たり前の日常でした。

しかしながら、突然全世界を襲ったCOVID-19の影響で、今年から某広告代理店で新入社員として新たな生活が始まった私は、オンライン研修のため顔も分からず、なかなか仲良くなれない同期、配属されても、オンライン上でどう距離を縮めたらよいか分からず、得意先にも存在を認知されているのかも分からない状況に、苦戦する1年間だったように思います。COVID-19の脅威に触れて、恐らく全世界の人々が、改めて、人と当たり前のように会話をし、触れ合える大切さを実感したのではないのでしょうか。

### ◆仕事

なぜ、私が突然、人と触れ合える大切さなんてことを語り始めたかと疑問に思う人もいるかもしれませんが。それは、私が現在、某メーカーをクライアントとして担当させて頂いており、ハンドソープ、消毒液、ボディウォッシュという商材を活用し、日本の衛生をどう底上げしていくか、この国難とも言うべき状況をどう改善できるかを、毎日のように考えているのが今の仕事だからです。このコロナ禍において、配属先がこのような部署になったことは、社会への貢献を学生時代から考えていた私にとってはとても幸運なことであったと思います。そして、仕事で携わらせて頂くなかで、改めて、人とつながる上で大前提となるのは肌の「清潔さ」であり、清潔であって初めて大切な人に触れられることを学びました。その「清潔」を広げること、そして、守り抜くお手伝いに、今後も尽力していきたいと思います。小野ゼミで学んだマーケティングという分野でお仕事を頂けているこの状況に感謝をしつつ、1日でも早く、チームの一員として良い成果を残せるよう引き続き精進して参りたいと思います。

### ◆プライベート

私事ではありますが、2020年10月に、ゼミ時代からお付き合いしていた大学の先輩から、プロポーズを受け婚約致しました。元気、素直、熱い、が似合う、とても素敵な人です。いつかゼミの飲み会にも一緒に参加させて頂きたく、その際は温かく迎えて頂けますと幸いです。

◆第2回オープンゼミにてご講演賜りました！（编者追記）



就活についてお話くださる平間さん



岩間さん、北澤さん（第16期）からの質問



集合写真

## 第 17 期生 卒業エッセイ

### ふるさと

第 17 期生 江碕 舞香

同期 14 人中 11 人が何の連絡もなくゼミを去った 17 期という代は、この先どのように語られるのだろうか。「ゼミ生が大量に辞めたヤバい代」、そんな一言で、飲み会や噂話のネタの 1 つとして語られてしまうのだろうか。私たちがゼミを守るために必死に戦ってきたこの 2 年間は、散った桜の花びらのように、いつのまにかどこかへ消えていってしまうのだろうか。人間が生き続けるために備えている「忘却」という機能によって、私は、もがいていた辛い日々の記憶を忘れ去り、この 2 年間を美談として語るようになるのだろうか。そうだとしたら、この卒業エッセイは、私たちの必死の 2 年間をありのままに書き残すことのできる、最後の場所なのではないだろうか。

このようにして、私は、かれこれ 1 ヶ月以上、この卒業エッセイの目的や内容についてあれこれと悩み、私の、私たちの 2 年間について様々書き残そうと試したが、結局、消してしまった。なぜか。「みんなで辞めて自分たちの代で小野ゼミを終わらせよう」、「2 年生が間違っただけで入らないように、ゼミ説明会では他ゼミを紹介しよう」、こんな心無い言葉が蔓延る状況を多くの人々が黙認し、中には楽しむ人すらいたような小野ゼミで、私たちが私たちの好きな小野ゼミを守ろうと必死で戦ってきた日々を事細かに語ろうとも、私たちの想いが後輩に伝わっていなければ、今後同じ危機が繰り返されてしまえば、そんな日々は何の意味も持たないからである。きっと、小野ゼミに入る前までの私なら自分の「頑張った」2 年間を書き残していただろう。しかし、この「頑張った」は、極めて相対的な自己評価に他ならず、人々に対して示すべきは、頑張った「結果」、すなわち、今後の後輩たちが築き上げてくれる「小野ゼミ」なのである。そして何より、頑張った「過程」は、自分自身と、共に戦ってきた仲間の心に残ってくれてさえいれば、それ以上の幸せはないということ、小野ゼミで過ごした 2 年間で教えてくれた。したがって私は、この卒業エッセイに私の、私たちの 2 年間を書き残す代わりに、私を支えてくれた人々への感謝の気持ちを書き残そうと思う。

まずは、18 期のみんなへ。私たち 17 期を救ってくれたのは、紛れもなく 18 期のみんなです。まだみんなが小野ゼミ生になる前、都竹くんをはじめとする 18 期のみんなが奮闘する私たちにかけてくれた言葉があったからこそ、17 期は諦めずに頑張ることができました。こんなに大量のゼミ生が辞めてしまった小野ゼミに入るという勇気ある選択をしてくれて、そして立派な小野ゼミ生として 1 年間頑張ってくれて、本当にありがとう。これからもみんなで力を合わせて、熱く、温かい、素敵なゼミを築いてください。

尊敬する友人たちへ。きっとこのエッセイを読むことはないと思うけど、みんなの存在が私に何度も勇

気をくれました。空気を読んで周囲と意見を合わせ、自らの意思を放棄するのならば、たとえ嫌われようと衝突しようと自らの意思を伝えるような、人として強いみんなに恥じぬ友でありたいと、何度も自分を奮い立たせることができました。たくさん話を聞いてくれて、応援してくれて、本当にありがとう。

お母さんへ。2年間（いや、22年間）、たくさんのお支援をありがとう。少しでも疲れないようにと、家から最寄り駅までの徒歩7分くらいの道を、毎日何時でも車で送り迎えしてくれたよね。徹夜続きだった11月には、「も〜習志野ナンバー恥ずかしいんだけど〜」なんて言いながら、移動時間に少しでも眠れるようにと、何度も三田まで送ってくれたり、終電を逃した私や同期を恵比寿まで迎えに来て、家まで送り届けてくれたりしたよね。気がついたら送迎のエピソードばかりになってしまったけれど、その他の面でもたくさん応援してくれて、本当にありがとう。

そして、私の大親友、森直也くんへ。人がいないからという理由で、ゼミ長になってしまい、その名にふさわしい能力も自信も何もなかった私をずっと支え続けてくれて、本当にありがとう。ゼミでは気丈に振る舞っていても、ストレスや睡眠不足ですぐご飯を食べられなくなってしまうような弱く未熟な私を、実務面でも精神面でも支え続けてくれました。どのような時も決して弱音を吐かず、自分の役割を全うしている森くんを心から尊敬し、自分もそんな人でありたいと思います。私は、そんなカッコいい森くんが論文代表として、人知れず悩みながら大きな責任を背負って頑張り続けてくれた日々を、私たちの好きな小野ゼミを残そうと共に戦ってくれた日々を、絶対に忘れません。最初はあまり仲良くなかったけど、今では何でも話せる（例えば、~~森くんの服って原色カラフルすぎるよねとか~~）、心から信頼できる友人です。これからも、誰よりも直向きな姿で、みんなから信頼され、慕われる、素敵な先輩でいてね。

最後に、私は、小野ゼミにたくさんのお礼を伝えたい。小野ゼミは、両手に抱えきれないほど多くの人生の財産を、私に与えてくれた。小野ゼミに入らなければ、学問に向き合う難しさや楽しさだけでなく、他人にはない自分の良いところや悪いところ、仲間との困難の乗り越え方を知ることにはなかったかもしれない。私にとっての小野ゼミは、16期に渡る歴代の先輩方と同じ、大切な、第2の「ふるさと」だ。



2年間本当にありがとうございました！（著者は下段右から3番目）

## あつという間では無かった 2 年間

第 17 期生 古橋 実咲

“入会したのが昨日のここのようだ。本当にあつという間の 2 年だった。”

卒業といたら、大体こんな出だしから入るのが普通だろう。思い返せば、中学や高校、サークルでも、こんな出だしで卒業エッセイを書いた気がする。では、小野ゼミの場合はどうだろうか？

“入会したのがはるか昔のここのようだ。本当に長い 2 年だった。”

そう、小野ゼミは、過去のそれとは正反対だ。学問の面で自信がつけられるような経験がしたい...そう意気込んで、入会した 2019 年の春から、5 年くらい経っているのではないかと錯覚するほどである。そしてそれは、小野ゼミでの活動が、あまりにも密度の高いものだったからであろう。本エッセイでは、そんな小野ゼミでの活動について、実際のコンテンツを挙げながら振り返りたいと思う。

まずは、入会してから初めて取り組む通称“コトラ”。そのさながら凶器ともいえる分厚さに圧倒されたのを覚えている。果たして自分に出来るのかと不安に思う中、A4 1 枚にびっしりと書かれた先輩の添削コメントを見て、勇気づけられたとともに、本当にこのゼミに入って良かったなと思った。そんな“コトラ”と同時期には、ディベート大会に取り組んだ。何度も練習をして臨んだが、両チームとも敗北を喫し、私達は早々に挫折を味わうこととなった。涙を流す同期もいる中、先生や先輩方が、“結果が全てではなく、その過程から何を学ぶかが重要だ”という言葉をくださった。これは 2 年経った今でも、私の基本的なスタンスとして根付いている。大会のすぐ後には、KUBIC に取り組んだ。最初は良いプランが思いつかず諦めかけていたが、先生や先輩方、一緒にやろうと手をあげてくれた同期のおかげで、最後には形にすることが出来た上に、企業賞を頂くことが出来た。初めて学問の面で賞を頂けたことは、かけがえのない経験になった。そして、メインコンテンツである三田祭論文では、初めての長期のグループ活動ということもあり、様々な壁に突き当たった。また、ここで自分の力不足と向き合うことにもなった。しかし、最後には論文を完成させ、海外学会で発表することが出来た上に、賞を頂くことが出来た。多くの苦悩があっただけに、達成感もひとしおであった。最後に、卒論について、自分の力不足を実感しつつも、先生や先輩方、同期が、幾度となくアドバイスしてくださったのおかげで、何とか形にすることが出来た。小野ゼミという質の高い環境において、自分の力で何か作り上げることが出来た経験は、私の誇りとなった。

これだけ書いても、まだまだ書ききれない。それが小野ゼミである。こうして振り返ると、小野先生、先輩方、同期や後輩の、親身なサポートがあったからこそ、1 つ 1 つの活動の過程で大きく成長し、かつ、成果に繋げることが出来たのだと改めて思う。皆さま、本当にありがとうございました。4 月からも、小野ゼミで得たものを胸に、“長かった”といえる社会人生活を送れるよう、精進します。

## 小野ゼミ生で居続ける意味を与えてくれた君へ

第17期生 森 直也

学問の道を歩み始めて2年。道の先はまだ見えそうにない。しかし、ふと振り返れば、もがきながらも前に進んだ自分の足跡が確かに続いていた。1度は歩みを止めようとした私に手を差し伸べ、今日まで共に歩んでくれた、もう1人の足跡の隣に。私は、そんなかけがえのない同期、江碯舞香に本稿を捧げる。

3年生の11月。私と彼女が所属する英論班は、韓国の学会KSMSで最優秀賞論文賞を受賞した。賞を手にした時のことはよく覚えている。私は、論文代表として、喜びを感じるよりも、小野ゼミ生で居続ける意味を見失ったからだ。それほどまでに論文執筆活動は、辛く苦しいものだった。就活や留学、日々着実に前進する日吉時代の友人は、論文の壁にぶつかり平気で後退する私を待ってはくれない。周りとは違う自分への焦りが常に付き纏った。KSMSの締切1週間前には、白紙の原稿を片手に、英論班解散の危機という絶望を味わった。死に物狂いで提出した原稿が審査を通過してからも、心は休まらない。ご都合により小野先生が韓国に同行できないという事態を前に、大事なゼミ生を君に任せられるのか、と論文代表としての自覚と責任が問われた。呆れたことに、当時の私は、このことを誰にも相談できなかった。せめて論文だけは完成させる。満身創痍の私には、その先も小野ゼミ生で居続ける自分を想像できなかったのだ。

そんな私に追い討ちをかけるように、もう1つの論文班が小野ゼミを去った。当時の雰囲気は最悪だった。入ゼミについて話し合っていたものの、多くの人が辞め、今いる人ですらいつ辞めるか分からない。こんな状況で本当に2年生は入ってくるのか。この環境に残って何が得られるのか。私は将来を憂いた。そんな中、たった1人前を向き、小野ゼミの存続を諦めなかったのが、彼女—江碯舞香だった。彼女は、雑務から矢面に立つ大役まで、その全てを引き受け、論文執筆活動と並行して行われた有志企画にも同期で唯一参加した。何事にも全力で打ち込む、小野ゼミの伝統を必死で守っていた。小野ゼミに懸ける愛を、行動で訴えるその姿を前に、私の胸には、かつての彼女の言葉が熱を帯びて迫った。それは、三田祭最終日の明け方、田町駅でのこと。それまで面と向かって話したことなどほとんどなかった彼女が意を決して話してくれた、小野ゼミに本当に必要な人材を集めるためには、私が必要だ、という言葉だった。論文代表としてもがき苦しんだ自分を側で見てくれていた彼女の目は、真剣だった。そうして迎えた第1回オープンゼミ。大量退会の事実を初めて公表したその日、私は、小野ゼミに残ることを彼女に告げたのだ。

それからというもの、私は、彼女の目指す“温かいゼミ”の実現に向けて、共に奮闘した。温かいゼミとは何か。彼女は、よくこう口にしていて。小野ゼミは忙しい。これまで、愚痴を吐いたり、批判したりする人もいた。たしかにストレスの溜まるゼミかもしれない。でもだからこそ、これからは、共に活動する仲間や、それを支えてくれる小野先生に対する感謝の気持ちや思いやりを忘れずに活動できる雰囲気

を作りたい、と。もちろんゼミの存続には2年生の入会が必要不可欠だ。しかし、ただ入会してもらえればいいわけではない。彼女の言う、温かいゼミでなければ、大量退会の悲劇は繰り返される。重要なのは、2年生の人数ではなく、1人1人がどれだけ小野ゼミに対して強い思いを持てるかどうか。この大切な考えを私に教えてくれたのは、彼女だった。しかし、彼女が私に教えてくれたことは、それだけではない。第2回オープンゼミに向けて、彼女と共に2年生に体験してもらおうケースを作成していた時のことだ。本番まで日数がかなり限られていたが、彼女は、ケースの資料の細部においても、妥協する姿勢を見せなかった。決して同期が少ないことを言い訳にしなかったのだ。きっと中途半端なものでは、温かいゼミの実現以前に、小野ゼミの良さを2年生に感じてもらえないことを、分かっていたのだろう。こうした彼女の考えや、それに伴う行動の全てが、いつしか私の中で大きな指針となっていった。そうして迎えた入会選考。私たちは、ついに18期生という後輩たちを迎え入れるまでに至った。

小野ゼミの先輩となり、まず求められたのは、マーケティングの知識よりも何よりも、後輩たちの声に耳を傾けることだった。これからどんな活動をしていきたいのか。そして、どんなゼミでありたいのか。先輩として、彼らの思いを汲み取り、小野ゼミという組織を動かしていかなければならなかった。そんな中、後輩たちとの心理的な距離を1番に縮めたのもまた彼女だ。彼女は、困っていることがあれば、たとえゼミ以外のことであっても親身に相談に乗り、多くの時間を割いて1人1人と真摯に向き合った。何より、後輩たちと接する彼女の言葉の節々には、小野ゼミに対する強い思いが感じられた。彼女の目指す温かいゼミ。その温かさを身をもって示していた。そうした彼女の姿勢が、同期が少ない上に、新型コロナウイルスによりゼミ生間の物理的な距離が広がる中でも、後輩たちからの信頼を生み、小野ゼミという組織を動かしていくことに繋がったのだと感じる。そうして、ディベートやビジコン、夏ケース、論文執筆活動と、かつて存続の危機に陥っていた小野ゼミの活動が、1つまた1つと息を吹き返していった。

後輩たちが四分野インゼミでの論文発表を終えた時、私は、1年前の自分を思い出さずにはいられなかった。論文発表を終えた彼らの表情は、賞を手にしても小野ゼミ生で居続ける意味を見失い、喜ぶことができなかった自分とは対照的に、笑顔に満ち溢れていたからだ。彼らは、共に活動してきた仲間を讃え合い、そして、活動を支えてくれたことに対する感謝の気持ちを伝えてくれた。私は、この時ようやく、小野ゼミの存続が果たされたことを実感した。彼女が目指した温かいゼミは、たしかにそこにあった。

過去を振り返った今、改めて思う。1度は立ち尽くしたこの道に続いていた自分の足跡は、小野ゼミ生で居続ける意味を与えてくれた彼女と共に歩んだ奮闘の軌跡だったのだ、と。彼女は、小野ゼミを守り、そして、変えた。これまで少なからず存在していた実力主義の冷たさを変えたのだ。彼女が示した温かさは、着実に後輩たちに受け継がれている。私は、この温かさが、今後5年、10年と小野ゼミが続いていく中で、受け継がれ続けることを切に願っている。そして、私は今年、大学院生として、またこの道を歩み出す。彼女がいてくれなかったら、決してここまで辿り着くことはできなかった。これから私は、彼女が守り、変えてくれた小野ゼミの行く末を見守りながら、1歩ずつ前に進んでいこうと思う。私に小野ゼミ生で居続ける意味を与えてくれた、君が紡いでくれたこの道を。まいかちゃん、今日まで本当にありがとう。

## 濃密な 1 年間

第 18 期大学院生 飯井 虹之介

私にとってこの 1 年間は非常に濃密なものでした。リーディングプログラムで SFC から商学研究科に編入した私は、もともと生物学が専門でした。これまでもっぱら試験管で微生物を相手にしてきた私にとって、初めて目にするマーケティングの世界は全てが新鮮で、最初の頃は不安でいっぱいだったことを今でも覚えています。そんな部外者である私を、小野先生は快く受け入れてくださり、根気強く指導してくださりました。石井さんを始めとして OB である博士の方々も、毎回欠かさずゼミに参加してくださり、私の研究に対して様々なアドバイスを頂き本当に感謝しております。実質的に 1 年という短い期間でなんとか、研究をまとめることが出来たのは、皆様の温かいサポートのおかげです。この場をお借りして、深く御礼申し上げます。

また、中々難しい社会情勢の中で、精力的に研究に取り組んでいる、学部生や同期の大学院生の皆様にも強くエールを送りたいと思います。今年はコロナウイルスの感染拡大によって学校がほとんど休校状態になってしまい、例年とは何もかも違う研究生活となりました。ゼミはほとんどオンライン上での開催となり、画面越しの絶妙な距離感に戸惑った人も多かったかなと思います。普段は授業のあとに食堂などに皆で行ったり、飲み会をしたりして親睦を深めるのだと思いますが、そういったある意味でのご褒美イベントも無く、毎週ゼミでボコボコにされてそれを修正するだけの生活の中で、孤独感とやるせなさを感じている人も多いかもしれません。今回エッセイを書くにあたり、皆さんとの思い出アピールになりそうな写真を探したのですが、残念ながらそういった物がなく、もう少し積極的にオンライン飲み会等企画すればよかったと後悔しております。ワクチンの開発が進んでいるとはいえ、ある意味で「真面目すぎる」学生生活がこれからもしばらくは続くと思いますが、どうか皆さんあまり根を詰めすぎないように、上手くオンライン上で他の人を頼る術を学んでいただければと思います。オンラインだと話しかけづらいという壁を感じる人も多いとは思いますが、私で良ければ相談に乗りますので（学術的な話はあまり期待しないでください）、Twitter でも LINE でも話しかけてくれればと思います。

12 年の SFC 生活から、いきなり飛び込んだ三田社会の中で、右も左もわからない状況からなんとかここまでやって来れたのは、様々な面で研究生活をサポートして下さった、先生方、OB のの方々、同期、学部生の皆という、多くの方々のおかげです。現時点では最終審査会が残っているのでまだ確定では無いですが、卒業できた暁には微力ながら今後のゼミ活動をサポートしていきたいと考えておりますので、皆様今後とも何卒宜しく願い申し上げます。

## ゼミ生（第 17, 18 期生）のご紹介

第 18 期ゼミ長 芝田 朱莉

OB・OGの皆様、小野晃典研究会第 18 期ゼミ長の芝田 朱莉と申します。今年、新型コロナウイルスの影響で 1 年を通してオンラインを主軸としたゼミ活動を行ってまいりました。三田祭はもちろん、懇親会や納会等の行事の全てが、オンライン開催あるいは中止となりました。OB・OGの皆様とお会いする機会にあまり恵まれず、ゼミ長就任のご挨拶が遅くなってしまいましたが、こうして OB・OG 会誌を通しての形ではあれど、機会をいただけたこと、大変嬉しく思います。



さて、ここからは、簡単にはございますが、共にゼミ活動に励んでいる第 18 期生を、皆様にご紹介させていただきたく存じます。第 18 期生は、男 3 名、女 3 名の計 6 名で構成されています。時には対立しつつも、互いに励まし合いながら、忙しくも充実した 1 年弱を過ごしてまいりました。そんな第 18 期生の特徴は、「全員で 1 つ」であるということです。誰 1 人として欠けてしまえば、第 18 期生の雰囲気はがらりと違うものになってしまうと確信できるほど、私たち第 18 期生は、「全員で 1 つ」です。この特徴は、Zoom という活動形式や、第 18 期生の個性がそれぞれ別分野に突出していたことによって生まれました。Zoom の話し合いでは、誰かが話している時には、自然と全員が話し手に注目するため、「全員で 1 つ」の話し合いを行う姿勢が身につく、誰もが全ての意思決定に関与することが恒例となりました。また、全員で 1 つの論文を執筆した三田論執筆期間には、1 人 1 人が、それぞれの得意とする分野で指揮を取り、互いに互いを導く、「全員で 1 つ」の連携を行うことで、厳しい半年間を乗り越えました。例年とは活動形態も内容も大きく異なりましたが、手を取り合って、何度も大きな壁を越えてきたこの 1 年間で、私たち第 18 期生は、非常に多くの経験を手に入れることができました。



四分野インゼミにて、第 18 期生の集合写真（著者は右端）

これからは、卒業論文執筆や第 19 期生の指導など、一見、第 18 期生全員で取り組む活動は減ってしま

うように見えます。しかし、私たち第18期生は、これまで「全員で1つ」でたくさんの壁を越えてきたのと同様に、これからも「全員で1つ」の精神で、1つ1つの活動に対して一丸となって取り組んでまいります。至らない点多々あるかと思いますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

以下、私たち第18期生の簡単なプロフィールをご紹介します。OB・OGの皆様と現役生の間の交流の一助となれば幸いです。



井原 真衣 (Web 広報代表・入ゼミ副代表・外務補佐)

- ◆出身高校：静岡雙葉高校（静岡）
  - ◆趣味・特技：中古のCDショップ巡り・ライブ・料理（元クッキング部）
- 言葉遣いと声が癒し。怒ったところは誰もみたことはありません。  
殺伐とした議論も、彼女の仲介があればすぐにほんわかします。



井上 岳哉 (本務代表・三田論代表)

- ◆出身高校：千葉高校（千葉）
- ◆趣味・特技：漫画・TCG・散歩

頭が非常に良い系男子。三田論は彼のアイデアから始まりました。  
しかし、彼の親父ギャグには誰も反応を返しません。彼もめげません。



加藤 愛奈 (外務代表・本務企画会計・SNS 広報副代表・OB・OG 会誌編集長)

- ◆出身高校：慶應義塾女子高校（東京）
  - ◆趣味・特技：描画・バンド・スノボ・スキューバダイビング
- スペック・人脈・コミュ力全てが完璧で最強なクイーン・オブ・小野ゼミ。  
仕事を一番に引き受けてくれる処理能力の高さには、脱帽です。



芝田 朱莉 (ゼミ長)

◆出 身 高 校： 水戸第一高校 (茨城)

◆趣味・特技： 日本舞踊・動物園水族館巡り・観劇

常に周囲に気を配り、皆の精神状態を良好に保ってくれる、セラピストです。その優しさと笑顔に何度も救われていることは、本人には内緒。(加藤)



周 辰安 (SNS 広報代表・外務副代表)

◆出 身 高 校： 慶應義塾高校 (神奈川)

◆趣味・特技： ピアノ・格闘技・描画

鋼のメンタルを持つ、体育会系。どんな状況でも明るさを忘れず、周囲をポジティブにしてくれます。SNS の運用能力が非常に高いです。



都竹 卓哉 (入ゼミ代表・Web 広報副代表・三田論副代表)

◆出 身 高 校： 浦和高校 (埼玉)

◆趣味・特技： ラグビー観戦・映画鑑賞

男気あふれる猪突猛進な男。ゼミのために明かした夜は数知れず、納得の行くまで資料にはこだわり抜きます。同期への気遣いもピカイチ。

また、前年度の OB・OG 会誌では、ご紹介が叶いませんでした第 17 期生 3 名のプロフィールも、併せて掲載させていただきます。第 17 期生の先輩方は、私たち第 18 期生が入ゼミした当初、「単なる先輩後輩という関係ではなく、17 期と 18 期を合わせて同期と思って、どんなことでも相談してほしい」と仰って、未熟な私たちを導いてくださりました。

そんな優しくて、マーケティング研究への熱意溢れる、素敵なお先輩を、ご紹介いたします。



江碓 舞香（ゼミ長・入ゼミ広報担当・三田祭冊子編集長）

- ◆出身高校：吉祥女子高校（東京）
- ◆趣味・特技：フィルム写真・剣道（三段）

愛すべき17期ゼミ長。ゼミ活動に対する誰よりも直向きな姿で、17期だけでなく、18期を導いてくれました。小野ゼミに欠かせない存在です。



古橋 実咲（本務企画・入ゼミ代表）

- ◆出身高校：慶應義塾湘南藤沢高等部（神奈川）
- ◆趣味・特技：雑貨集め

デザインセンスが抜群。どんなに忙しくても、高クオリティーで仕事をこなします。議論では、周りをよく見て客観的な意見を出してくれます。



森 直也（本務代表・インゼミ代表・OB・OG 会誌編集長）

- ◆出身高校：多摩高校（神奈川）
- ◆趣味・特技：テニス・水泳

小野ゼミ自慢の論文代表。決して弱音を吐かず、誰よりも真摯に論文と向き合い、努力を怠りません。そんな森さんに多くのゼミ生が憧れています。



初の対面ゼミにて、全体の集合写真（著者は小野先生の左隣）

末永いご厚誼のほど、何卒宜しく願い申し上げます。

## 大学院生のご紹介

第17期大学院生 於 詩琦

OB・OGの皆様、こんにちは。小野晃典研究会修士2年の於詩琦です。2020年度は、メディア研究科からデュアルディグリー生としていらっしゃった飯井虹之介さんと、中国西安外国語大学からの王珏さんを新たに迎えて、小野ゼミ大学院生は全体で3名となりました。本稿では、大学院生の簡単なプロフィールと研究活動について、皆様にご紹介申し上げます。

### 於 詩琦 (お し き, 第17期大学院生)

現在の学年：修士課程2年

研究テーマ：「どれだけ既存製品と違った新製品を消費者は好むか：知識量と製品特性に着目した実証分析」

最後に一言：この1年間、色々ご指導をいただき、誠にありがとうございました。引き続き、よろしくお願いいたします！



### 飯井 虹之介 (い い こう の す け, 第18期大学院生)

現在の学年：修士課程1年

研究テーマ：「スポーツ観戦動機探究 —アウェイツーリズムの特殊性に着目して—」

最後に一言：1年間様々ご指導を頂き誠にありがとうございました。今後ともよろしくお願ひします。



### 王 珏 (お う か く, 第18期大学院生)

現在の学年：修士課程1年

研究テーマ：「垂直方向における消費者の身体移動と身体位置が広告コピーの説得効果に与える影響：概念メタファー理論に基づいて」

最後に一言：1年間のご指導ありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



今年度の大学院ゼミは、新型コロナウイルスの影響で、全てオンラインで行いました。学会で発表する機会も、例年と違い、ございませんでした。来年度は多様な学会活動が展開できるよう祈っています。

来年度は新たに、修士課程に岩間雄亮さん、森直也さん、楊錦煌さん、そして謝雪怡さんを迎えます。毎週金曜日の大学院ゼミ（10時～13時）に、是非ご来訪ください。お待ちしております！

## 2020 年度ゼミ活動紹介

第 18 期生 加藤 愛奈

小野晃典研究会 OB・OG の皆様，初めまして。第 18 期外務代表の加藤愛奈と申します。この度は，OB・OG 会誌編集委員として，皆様にご挨拶できる機会を頂き，幸甚の至りに存じます。私からは，本年度行ったゼミ活動の概要をお伝えさせていただきます。



まず，学年ごとの活動の流れです。今年度の 3 年生にあたる第 18 期生は，基礎文献レポートや統計分析技法レポートを通して，マーケティングの研究において必要な基礎知識のインプットに励みました。その後，ビジネスプランコンテストへの参加や三田祭論文の執筆で，それらの知識のアウトプットに挑戦しました。さらに，秋学期からはそれぞれの役職の仕事を先輩方から教わり，ゼミ運営に携わりました。今年度の 4 年生にあたる第 17 期生は，ご自身の卒業論文を執筆しながら，統計分析技法レクチャーのアシストや三田祭論文の添削など，後輩指導にもご尽力くださいました。

ここからは，今年度の主な活動につきまして，写真を添えてご紹介させていただきます。

2020 年 4 月に第 18 期生の入会が決まり，今年度の活動が開始いたしました。新型コロナウイルスの影響を受け，ゼミも全面オンラインでの活動が決定し，異例の事態に皆が探り探りの状態でした。

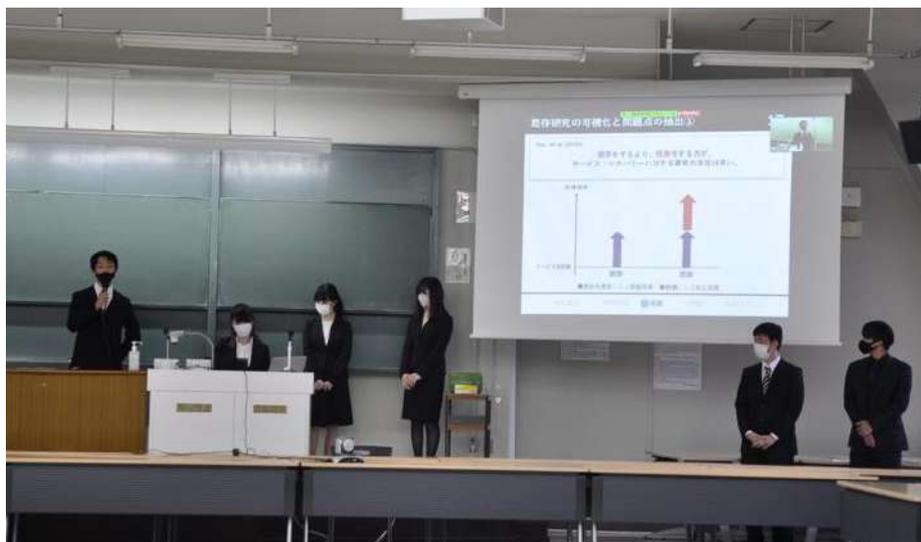
5 月には，「食と農・流通における新型コロナウイルス対策」というテーマのビジネスプランコンテストに参加しました。第 18 期生は 2 チームに分かれ，それぞれ花卉業界と移動販売に焦点を当てたビジネスプランを練りました。入会からわずか 1 ヶ月であるにもかかわらず，先輩方と小野先生は，ご自身の研究かのように親身にご指導くださいました。その結果，実務家や大学教授のビジネスプランを凌いで，企業賞と佳作を頂くことができました。



提言チーム（左）と論文チーム（右）の受賞記念写真

9月下旬には、夏合宿に代わり、オンライン上で例年のコンテンツを実施する、「密ゼミ」を開催いたしました。密ゼミでは、小野ゼミ名物の「24時間ケース・メソッド」から、三田祭論文と卒業論文の中間発表やレクリエーションまで、ほぼ例年どおりの活動が叶いました。今年の24時間ケースのテーマは、「KOSEのシャンプー事業参入」でした。第17期生が入念に準備してくださっただけであり、第18期生は苦戦しながらも、楽しんで取り組むことができました。終盤のレクリエーションでは、学部生のみならず、小野先生や大学院生の皆様にもご協力いただき、オンラインという壁を超えて、親睦を深めました。

その後は、三田祭論文の執筆に注力し、11月中旬の慶應マーケティングゼミ合同研究報告会、そして12月上旬の四分野インゼミ研究報告会にて、発表を行いました。第18期生は全員で1つの論文を執筆しており、研究テーマは「サービス・リカバリー戦略——謝罪と感謝の効果の相違に着目して——」でした。日頃の活動はオンライン、発表は一部対面という不都合の中、最終的には論文自体から発表まで、満足のいくクオリティで披露することができ、他ゼミの学生や教授の皆様から大変高い評価をいただきました。



四分野インゼミで発表する第18期生

以上のように、今年度も実りの多い活動が実現したのは、OB・OGの皆様のご協力あってのことです。そこで、この場をお借りして、お世話になりましたOB・OGの皆様をご紹介させていただくと共に、感謝の気持ちを綴らせていただきます。

6月12日に開催されたOB講演会にて、奈良崎亮介さん（第2期）、松山昌司さん（第5期）、そして梶田伸吾さん（第12期）がご講演くださいました。また、千葉貴宏さん（第5期）、菊盛真衣さん（第7期）、竹内亮介さん（第9期）、白石秀壽さん（第9期大学院生）、中村世名さん（第10期）、そして石井隆太さん（第10期）が、ご自身のゼミ生の皆様とご一緒に参加され、講演会を盛り上げてくださいました。大変勉強になると同時に、楽しい時間を、ありがとうございました。

5月に上述のビジネスプランコンテストに応募した際、石田陽一郎さん（第8期）が、多くのアドバイスをくださいました。経験が浅く、右も左も分からない第18期生に道を示してください、ありがとうございました。

ました。

7月の入ゼミイベントで放映した小野ゼミ紹介動画にて、山本彩理さんと矢野瑞喜さん（第13期）が、小野ゼミの良さをOB・OGならではの視点でお話してくださいました。お2人が生き生きとご活躍される様子は、第18期生のモチベーションも大きく引き上げました。ありがとうございました。

11月22日と23日にZoom上で開催した、三田祭論文の展示会に、木幡慶斗さん（第16期）が来訪くださいました。研究内容についてはもちろん、私たちの知らない時代の小野ゼミのエピソードなどもお話くださり、大変賑やかな時間となりました。面識のない第18期生にも気さくに喋りかけてくださり、ありがとうございました。

12月11日には、入ゼミ説明会に平間遥絵さん（第16期）がご登壇されました。就活報告会として、小野ゼミでの経験が、ご自身の就職活動と、入社後のお仕事にどのように活かしているかをお話くださいました。それは説明会に参加していた2年生にはもちろん、就職活動中の第18期生にとっても大変勉強になる内容で、質疑応答では質問が絶えませんでした。お仕事の合間を縫ってまで駆けつけてくださり、ありがとうございました。

振り返ると、例年のように直接お会いすることが叶わないものの、OB・OGの皆様のお力をお借りすることは例年以上に多かったように感じます。皆様、お忙しい中、小野ゼミのために貴重なお時間を割いてくださり、誠にありがとうございました。

私たちは、小野ゼミOB・OGの皆様の輝かしいご活躍



四分野インゼミ後の記念写真（著者は左から3番目）

に憧れて、小野ゼミに入会いたしました。しかし、慣れない数々の書式ルール、個性的すぎる同期との衝突、そして全面オンラインという異例の活動など、思うように活動できないことが多い1年間でした。自分が小野ゼミ生を名乗って良いのか、悩んだことのある第18期生は、私だけではないはずです。それでも、皆様のご協力のおかげで、ここまで充実したゼミ活動が叶いました。そして今では、2年生に胸を張って小野ゼミの話をしている自分たちがいます。

これからも小野先生、先輩方、そして来年度から迎える第19期生と共に、小野ゼミの伝統を大切に守りつつ、私たちにしか作れない小野ゼミを目指して、全力で活動に取り組んでまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 第 18 期生 三田祭論文プロジェクト紹介

# 三 田 論

### サービス・リカバリー戦略 ——謝罪と感謝の効果の相違に着目して——

サービスの失敗は、顧客の自尊感情を低下させ、サービスに対する満足度を低下させる。既存研究においては、サービスの失敗に対する心理的補償として、謝罪よりも感謝が効果的であると主張されてきた。しかしながら、彼らは、謝罪と感謝の特性の多様な相違点のうち、一側面しか考慮していない。本論は、既存研究で見過ごされていた相違点に言及しつつ、謝罪と感謝それぞれがより効果的である場合を分かち、基準を識別する。



12月に開催された、四分野インゼミにて



初の対面ゼミにて

今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、我々第 18 期生は、例年のようにグル学に集まったり、恵比寿の某チェーン店で徹夜したりすることは叶いませんでした。しかし、我々は「歴代の先輩方に引けをとらないクオリティの研究で、マーケティング研究に新潮流を」という高い志を掲げ、意欲的に活動に取り組んでまいりました。論文執筆活動が思うように進まず、小野ゼミ生としての自信を失うことも、多々ございました。しかし、小野晃典先生や先輩方のお力をお借りしながら、同期と日々支え合うことで、満足のいく論文を書き上げることができました。12月に開催された四分野インゼミ研究報告会では、三田キャンパスにて堂々たる発表を行い、他ゼミの教授から「小野ゼミの研究は、非常に質が高い。」と、高い評価を頂きました。未熟な我々第 18 期生を、最後まで熱心にご指導くださった小野晃典先生、夜遅くまで議論にお付き合いくださった第 17 期生の先輩方、そして、的確なアドバイスをくださった第 16 期生、ならびに大学院生の方々、本当にありがとうございました。第 18 期生一同、心よりお礼申し上げます。

## 第 17 期生 卒業論文テーマ紹介

江崎 舞香 「ゲーム型プロモーションにおける報酬の獲得の成否が消費者の店舗に対する

態度に及ぼす影響——消費者の日常的な運の自己認識に着目して——」

既存研究は、ゲーム型プロモーションにおいて報酬の獲得に成功した消費者は、成功に伴って知覚した幸運を店舗に帰属させるため、店舗に対して好意的な態度を形成すると主張したが、彼らは、この因果を阻害する要因を看過している上、獲得に失敗した消費者を考慮していない。本論は、因果を阻害する要因として、消費者の日常的な運の自己認識（高い vs. 低い）を同定し、獲得の成否が消費者の店舗に対する態度に及ぼす影響を吟味する。

古橋 実咲 「製品の『顔』の FWHR 比率が消費者選好に与える影響

——社会的勢力感に着目した再検討——」

FWHR 比率、すなわち、顔の縦横比は、その顔の人の評価を左右する。具体的には、横長の顔の人の方が、優勢であると見なされて、高く評価されるという。この心理学研究の知見を援用して、製品の「顔」が横長であるほうがよいと主張する先行研究がある。本論はこの主張に着目し、製品の「顔」の FWHR 比率が製品に対する消費者の評価に与える影響を、消費者の社会的勢力感の個人差に焦点を合わせて探究する。

森 直也 「『複合インセンティブ』対『二重確定インセンティブ』

——フレーミングに着目して——」

近年、企業の SP には、消費者が必ず獲得できる報酬と抽選によって獲得できる報酬を組み合わせ、言わば「複合インセンティブ」や、消費者が必ず獲得できる報酬を 2 つ組み合わせ、言わば「二重確定インセンティブ」が導入されるようになってきた。このうち、いずれが有効であろうか。本論は、消費者がインセンティブをどのようにフレーミングするかに着目し、複合インセンティブおよび二重確定インセンティブの価値を比較する。



四分野インゼミ終了後の小野先生と 17 期生

## 食と農・流通（小売・外食）における新型コロナウイルス対策 懸賞論文・提言 受賞報告

第18期 井上 岳哉 芝田 朱莉 都竹 卓哉

### ◆食と農・流通（小売・外食）における新型コロナウイルス対策 懸賞論文・提言とは...？

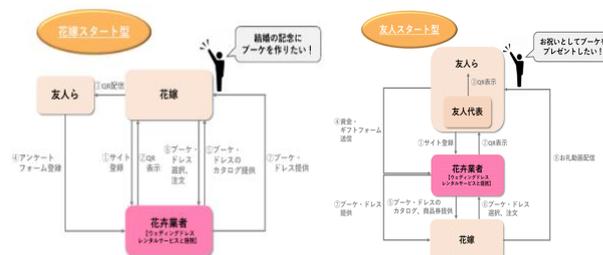
食と農・流通（小売・外食）における新型コロナウイルス対策懸賞論文・提言とは、流通経済研究所が主催した懸賞企画であり、新型コロナウイルスに伴って経済的損失を被った食と農に携わる多くの事業者を救うために、経済的な政策やマーケティング的な対策に関する論文・提言を募集しました。この懸賞企画には、食、農業、漁業、林業、小売業、外食業の経済損失への対策に関する5000字以内の提言、または10000字以内の論文を作成すれば、学生のみならず、実務家や研究者の方々も作品を応募することが可能です。



第18期生有志2チームが参加し、1チームが提言を、もう1チームが論文を応募しました。そして、提言チーム(井原, 加藤, 周, 都竹)は企業賞を、論文チーム(井上, 芝田)は、佳作を受賞しました。

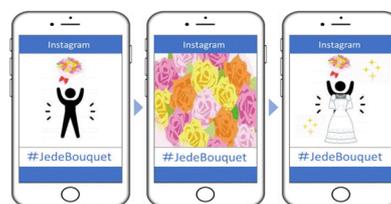
### ◆提言の概要

提言チームが執筆した提言のタイトルは、「#JedeBouquet——花卉業界の経済損失の軽減方法に関して——」です。具体的には、結婚式に代わるイベントとして、社会全体に幸せを繋ぐ「SNS上でのブーケトス」を行うというものです。この提言の最終目的は、新型コロナウイルスの影響によって低下した花卉の需要を創



提出用資料のビジネスモデル図

造し、花卉業者が被った経済損失を軽減するとともに、結婚式が中止になりながらも、花嫁・花婿の結婚を周囲に報告し、感謝の意を伝えたい、そして周囲の人々の、新しい夫婦のスタートを祝福したいという願いを叶えることです。そのために、ウェディングブーケの販売とウェディングドレスの貸し出しを行うオンラインサイトを



動画のイメージ図

を作り、花嫁・花婿にブーケとドレスを届けます。なお、ブーケとドレスの費用は、周囲から振り込まれる祝い金でまかないます。また、ブーケとドレスを受け取った花嫁・花婿は、結婚式のブーケトスのように、自宅でドレスに変身し、ブーケを投げる動画を撮影します。その動画を、「#JedeBouquet」というハッシュタグをつけて、結婚報告とともにSNSに投稿します。そして、ハッシュタグを見た他の花嫁・花婿が、同じような投稿を行い、「SNS上でのブーケトス」を繋げていきます。

#### ◆活動後記

この提言書の執筆に取り組み始めたのは、小野ゼミの活動が本格的に始まった日から、たった3週間程度しか経っていない時期でした。新米の小野ゼミ生であった私たちが、この提言書を書き上げ、サントリーフラワーズ賞という賞まで頂くことができたのは、共に執筆活動に取り組んだ仲間と、この提言を執筆するにあたって多くのご指摘やご助言をいただいた小野先生、第8期の石田陽一朗さん、大学院生のみなさん、そして第17期生の先輩方のおかげです。本当にありがとうございました。

今振り返ると、私たちの班には、アイデアベースで考えることが得意な人が多く集まり、アイデアの方向性は、あまり時間をかけずに決まりました。しかし、アイデアを論理的に且つ分かりやすく伝えることが得意な人はいなかったため、執筆作業には非常に苦しみました。サブゼミや本ゼミで、非常に多くのご指摘やご助言をいただく度に、「ここまで考えるべきだったのか」、「こんな風に考えたらよかったのか」と、自分たちの考えの未熟さを痛感しながら、より良い提言書を書き上げようと、試行錯誤を続けました。

ただ、執筆活動では、苦しさよりも充実感を味わうことの方が多かったです。この提言書の執筆活動に参加するまで、私は、大半のグループワークにおいて、積極的に自分の意見を言うことはなく、本気でグループワークに参加したことがほとんど無かったものの、この提言書の執筆活動においては、積極的に自分の意見を言い続け、本気で取り組むことができました。それは、皆が、より良い作品を作りたいと思い、自分の意見に対して真剣に意見を返し続けてくれたおかげに違いありません。また、提言書内の「ウェディングブーケ」の文字に「ウェディング」の文字を付けるべきか付けないべきか、について意見が対立したことがあったように、皆が細部までこだわり抜こうとする姿勢があったことも、1つの要因だと思います。このように、普通の人からすれば些細に見えることにまで手を抜かず、1つ1つの活動に真剣に向き合うことで得られる充実感は、やはり小野ゼミだからこそ味わえるものだと思います。

改めて、提言書の執筆の過程において、私たちにお力を貸して頂いた皆様に対して、感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。(都竹)

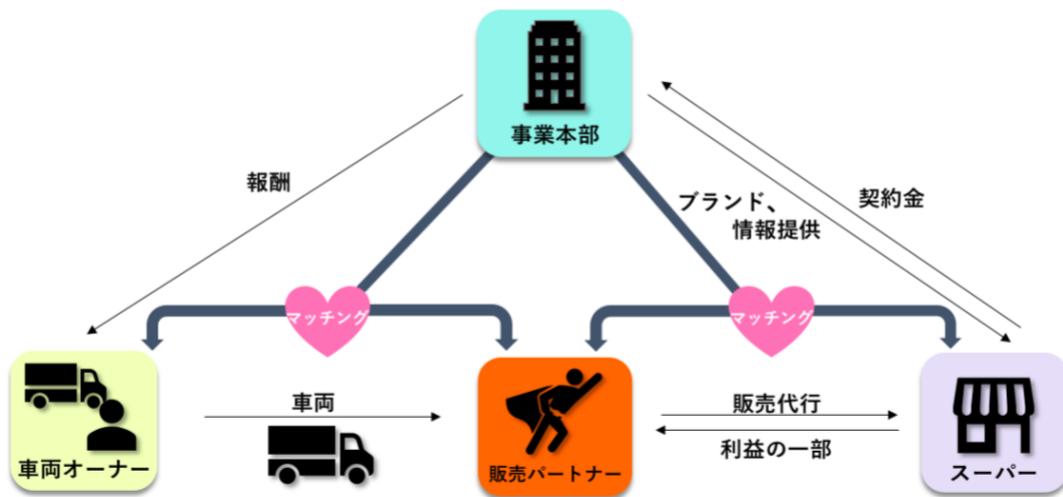


提言チームの受賞記念写真

奥が加藤、手前の左から、著者・井原・周

#### ◆論文の概要

論文チームが執筆した論文のタイトルは、「シェアリングエコノミーによる買い物難民救済——移動販売事業の課題を考える——」です。買い物難民問題は、新型コロナウイルスの蔓延によってより一層深刻化した社会問題の1つです。買い物難民を救済するに際して、移動販売事業は、有効であると期待されています。しかしながら、既存の移動販売事業は、取引コスト理論の観点から見ると、販売パートナーの事業参入リスクが高いという問題を抱えています。そこで私たちは、既存の移動販売事業の問題を解決すべく、シェアリングエコノミーのビジネスモデルを取り入れた新たな移動販売事業を提案しました。具体的には、シェアリングエコノミーのビジネスモデルを利用することによって、移動販売事業で使用される車両を、既存の移動販売事業が使用している移動販売専用車両ではなく、有効活用されていない余剰車両へと変更します。そのために、事業本部が仲介して、余剰車両を所有する車両オーナーと販売パートナー、販売パートナーと移動販売事業の需要があるスーパーをそれぞれマッチングさせます。そして、販売パートナーは、車両オーナーから余剰車両をシェアしてもらい、スーパーの移動販売を代行します。このように、余剰車両をシェアすることで、販売パートナーは、取引特定の投資をせずにすむため、事業参入に尻込みしなくなります。つまり、移動販売事業は、シェアリングエコノミーのビジネスモデルを利用することで、迅速に普及させることが可能になり、ひいては、新型コロナウイルスで増加した大勢の買い物難民を救済することが可能になるのです。



本論のビジネスモデル図

#### ◆活動後記

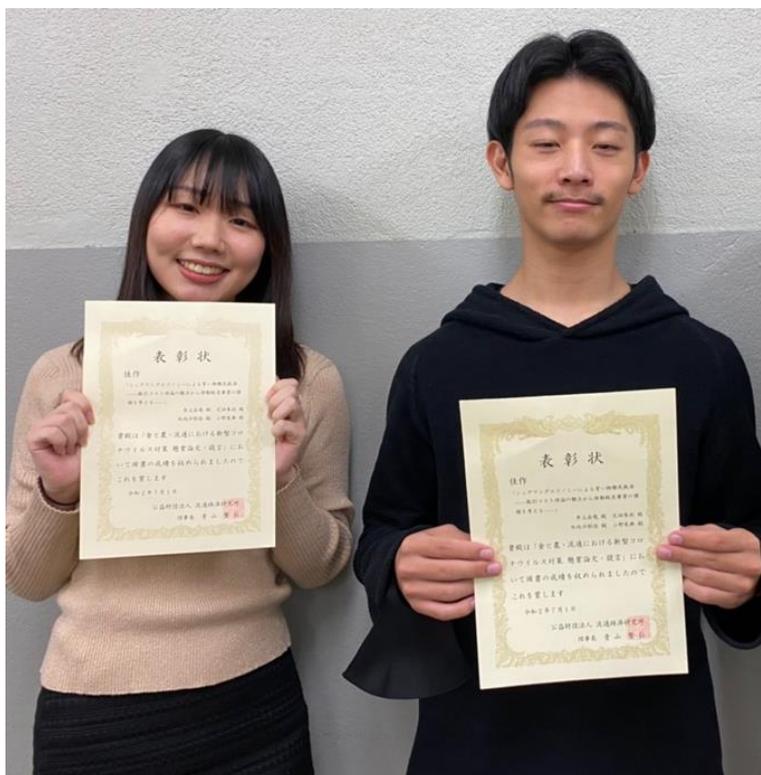
小野ゼミに入会して間もない5月中頃、私たちは、数々の輝かしい成績を残してきた小野ゼミの先輩方に憧れ、「ビジネスコンテストで必ず入賞する」という強い想いを抱いて、ビジネスコンテストに挑みました。

やる気十分で始めた活動でしたが、2週間で1本の論文を完成させなければいけないにもかかわらず、

テーマをなかなか決められなかったこと、自らの主張を学術的かつ論理的に伝えることに苦戦し、思うように執筆を進められなかったことなど、私たちは、予想だにしない様々な困難に直面し、論文を完成させることができないのではないかと考えることもありました。そんな私たちに救いの手を差し伸べてくださったのは、恩師である小野先生と先輩方でした。小野先生と先輩方のお力添えのおかげもあり、私たちは、締め切り直前になって、ようやく論文を完成させることができました。しかしながら、締切直前まで修正作業を続けていたため、論文を添付したメールを送信できたのは、締切の5秒前になってしまったのです。私たちは、メール送信後も、締切に間に合わなかったのではないかとという不安に襲われ、論文を完成させた喜びを味わうことができませんでした(以後、余裕を持って行動することを心がけるようになりました)。

そうした不安を忘れるほど忙しい生活を送っていた私たちの元に、1通の知らせが届きました。佳作受賞の知らせです。私たちの論文と想いは、無事に届いていたようです。このとき初めて、論文を完成させた実感と喜びが、湧きました。私たちは、Zoom上で喜びを分かち合った瞬間を今でも鮮明に覚えています。そして、論文を完成させるにあたり、ご尽力いただいた小野先生や先輩方に対し、佳作受賞という形で恩返しをすることができて、本当に嬉しかったです。

最後になりましたが、改めて、昼夜問わずご指導をしてくださった小野先生、貴重なご意見をくださった第8期の石田陽一朗さん、大学院生、第16期生の先輩方、いつも近くで支えてくださった第17期生の先輩方に、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。(芝田, 井上)



論文チームの受賞記念写真  
左から、芝田・井上

## 四分野インゼミ研究報告会参加報告

第18期生 井上 岳哉

### ◆四分野インゼミ研究報告会とは？

四分野インゼミ研究報告会は、商学部を構成する四分野（経営、会計、商業、経済・産業）のゼミが、それぞれの研究成果を報告する場です。今年は、昨年と同様に岡本ゼミ、小野ゼミ、佐藤ゼミ、園田ゼミ、高橋ゼミ、高田ゼミ、山本ゼミ、横田ゼミの計8つのゼミが参加しました。新型コロナウイルスの感染を考慮してオンライン参加という選択肢もありましたが、私たち第18期にとっては、この四分野インゼミが唯一の対面でプレゼンをする機会ということもあり、例年通りオフラインでの参加となりました。

### ◆プレゼン練習の様子

三田論の研究報告は、これまでも10月の三ゼミ合同中間プレゼン会、11月のマケ論報告会で経験してきました。プレゼン内容はほとんど同じなので、四分野インゼミも大丈夫だろうと甘く見ていましたが、いざオフラインでプレゼンをしてみたところ、オフラインでのプレゼンより断然難しいことがわかりました。小野ゼミではオンラインプレゼンしか経験がなかった私たちには、ジェスチャーや目線など、オフラインプレゼンにおいて重要な要素が身につけていなかったのです。私たちは、小野先生や先輩方からもご指摘を受けて危機感を抱き、ゼミ終了後に三田キャンパスに残り、プレゼンの改善を試みました。1人ずつ壇上でプレゼンし、メンバー同士で指摘し合い、全員ができるまで練習を重ねました。森直也先輩（第17期）が練習にお付き合いくださり、言葉のアクセントから身振りに至るまでご指導くださいました。

### ◆プレゼン当日

当日、私たちは、どのゼミより早くキャンパスに集まり、リハーサルを行いました。前日に練習した時よりもずっと発表がよくなっており、皆が家で1人練習をしていたのだとわかって胸が熱くなりました。緊張感が漂う中、四分野インゼミが開会し、あっという間に小野ゼミの出番が回ってきました。私たちのプレゼンは、週の「こんにちは、小野晃典研究会です。」の一言から始まりました。彼



Zoom 上でのプレゼンの様子

のはきはきした声と芝居は、聴衆の眠気や疲れを吹き飛ばし、彼らの意識をこちらに向けてくれました。次にプレゼンした芝田に関しては、さすがゼミ長といったプレゼンでした。既存研究に関するこのパートは少し理解が難しい内容でしたが、彼女の丁寧な話し方のおかげで、初めて聞く聴衆もすんなり理解できていたように見えました。3番目のプレゼンターは都竹でした。彼特有の、落ち着いた話し方は、聴衆の心に響いたでしょう。仮説提唱パートを務めたのは、私と井原です。まず、仮説1に関して私が解説しました。聴衆に一番理解してもらいたいパートということもあり、プレッシャーを感じて、足をがくがく震わせていました。私は、教卓の後ろに立っていたので聴衆にばれなかったのは幸いでした。一方で、仮説2を担当した井原は、緊張した様子もなく、いつも通り落ち着いて話していました。続く実験内容パートは加藤が担当しました。15分という発表時間内に収めるために、実験パートはやや簡略的な内容となりましたが、彼女がうまいことまとめてくれたおかげで、実験の正当性を聴衆にしっかり伝えられました。最後は、都竹が締めて、私たちのプレゼンは終わりました。続く質疑応答では、加藤と私が矢面に立って他ゼミ生と活発な議論を交わしました。発表後、教授陣から多くの称賛と労いの言葉をいただくことができ、私たち自身、納得のいくプレゼンとなりました。第18期生全員が個性を発揮して、これまでで一番のプレゼンだったと思います。



プレゼン終了後、肩を組んで写真を撮る第18期生  
(著者は左から3番目)

#### ◆プレゼン後記

無事に今回の四分野インゼミを終えることができましたが、この成功は、私たち第18期生だけの力では成し得ませんでした。四分野インゼミに参加するにあたり、小野先生をはじめ、多くの先輩方から手厚くご指導いただきました。本当にありがとうございました。最後に、半年間に渡る三田祭論文執筆活動のフィナーレを、最高のプレゼンで華々しく飾ることのできた第18期生全員に、最大限の感謝と労いの言葉を送り、第18期の四分野インゼミ研究報告会参加報告の結びとさせていただきます。

## [編集委員紹介]

第16期OB 岩間 雄亮  
第17期生 江碕 舞香・古橋 実咲・森 直也  
第18期生 加藤 愛奈・井原 真衣・井上 岳哉・周 辰安・芝田 朱莉・都竹 卓哉

## [編集後記]

OB・OG 会誌の編集作業は、書式ルールとの戦いです。書式ルールを睨めつけるのは、実に三田祭論文の執筆活動以来で、しばらく就職活動に耽っていた私に、自身が小野ゼミの一員であることを思い出させてくれました。今年度のOB・OG 会誌編集作業は、編集長を務めた私の至らなさに、昨年とは比べ物にならないほど慌ただしかったかと思えます。それでも、小野ゼミの歴史を繋ぐこの冊子が今年も完成したのは、一重に周囲の協力があってのことです。私がミスをしてテンパった時、すぐに私に代わって作業を取り仕切ってくれた、世界一頼もしいゼミ長、芝田。深夜まで校正をしてくれ、井原を始めとする同期と、先輩方。そして、短期間に大量の原稿を丁寧にチェックして下さった、小野晃典先生。未熟な編集長に絶えずご助力くださり、本当にありがとうございました。

また、OB・OG エッセイを寄稿して下さった皆さまにも、深くお礼申し上げます。ご家族やパートナー達との心温まるエピソードで頬が緩むことも、お仕事等でご活躍される様子を見て「後輩として、自分ももっと頑張らねば!」と、気持ちが奮い立つこともございました。それらのエッセイを1番に読むことができたのは、編集長の特権です。

小野ゼミの数多い魅力の1つに、「縦の繋がり」の強さがあります。本会誌が、それを強める一助となることを願って、結びの言葉とさせていただきます。

第18期OB・OG 会誌編集長 加藤 愛奈

OB・OG 会誌の編集作業が、こんなにも大変なものだとは思っても寄りませんでした。誰に何の原稿をいつまでにお願いしたのか、書式の確認はどこまで終わったのか、今比較的手の空いている人は、誰なのか。確認しなければならない事項は次から次へと湧いて出てきて、締め切り間近は、本当に生きた心地がしませんでした。しかし、どんなに「大変だ、どうしよう!」と焦っていても、どこか心の中には、この状況を楽しむ自分がいました。どうしてそのような自分がいたかという、三田論執筆期間中の慌ただしさを思い出して、懐かしくなったからでもありますし、子供の頃の夢が、出版社の編集室に勤務することだったからでもあります。久しぶりに、第18期生のみんなや大好きな先輩方と一緒に、憧れであった編集のお仕事を行う機会をいただきまして、本当にありがとうございました。最後に、原稿を執筆して下さったOB・OGの皆様と、非常にお忙しい中、原稿を1つ1つ確認して下さった小野晃典先生に、心よりの感謝を申し上げます。

第18期ゼミ長 芝田 朱莉

このOB・OG 会誌の編集に携わる機会を頂けたことへの喜びと、ご協力いただいた皆様への感謝の言葉を述べさせていただきます。まず、編集長の加藤さんは、OB・OG 会に向けた準備や会誌の編集作業に誰よりも注力してくれました。高熱を出していながらも、「皆と作業してたら熱下がった」なんて言いながら作業に取り組む彼女の異次元のタフさには脱帽です。そして、最後までお時間を割いてお力添えをいただいた小野先生や先輩方に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

第18期外務補佐 井原 真衣

一昨年、昨年、と編集後記を読んでもらっている稀有な皆様におかれましては、ここでお会いするのはもう3回目になってしまいました。実は今年は、編集作業にほぼタッチしていません。優秀な17期生と18期生のおかげです。来年のOB・OG 会では、皆様と直接お会いできることを、切に願っております。

第16期OB 岩間 雄亮

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会 OB・OG 会誌 Vol. XIV

2021年2月11日発行 著者 小野晃典研究会 OB・OG・現役生一同  
編者 小野晃典研究会 OB・OG・現役生有志  
(編集責任者 加藤 愛奈)  
発行元 慶應義塾大学商学部小野晃典研究会

Copyright © 2001-2021, Prof. A. Ono's Seminar of Marketing,  
Keio University, Tokyo, Japan. All rights reserved

ONO  
SEMI  
NAR  
SINCE  
2001  
2001